●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 11-6

男の子

目次

子ども研究ノート（その5）　父親らしさ喪失の時代の背景 …… 2

調査レポート　男の子

要　約 …… 8

はじめに …… 12

1．男の子・女の子

- 自分自身について …… 13
- 生活のスタイル …… 21

2．友だちとの関係

- 気になる女の子 …… 28
- 友人観 …… 31
- 異性とのかかわり方 …… 34

3．その将来展望

- 将来の暮らし …… 40
- 結婚したら …… 42
- 男の子とは？ …… 46

資料1　調査票見本 …… 47

資料2　学年・性別集計表 …… 61

＊おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

子ども研究ノート（その5）

父親らしさ喪失の時代の背景

静岡大学教授
深谷昌志

●引っぱり型の父となだめ型の母

この号では男の子のあり方を問題にしようとしている。これまで男女という見方をすれば、女子のほうにさまざまな問題があるといわれてきた。しかし、このところ男子のほうがむずかしい課題をかかえている。実をいうと、これは男女だけでなく、父母についても父のほうがむずかしい問題が多い。そこで、ここで先行研究などと関連させて、男の子モデルの原型ともいうべき父親の問題をまとめておくことにしたい。

現在、家族社会学や発達心理学などの研究者が父親を語るとき、もっともポピュラーに引用されるのが、アメリカの社会学者、パーソンズの理論である。

パーソンズは「道具的」instrumental と「表出的」expressive という、なんとも訳しにくい概念を提唱している。この2つの概念は、パーソンズが、研究仲間のベールズとともに、小集団を対象とした共同研究を重ねる過程で見いだしたもので、何人かの人間が小さなグループを作って、なんらかの課題を解決しようというとき、そこには、目標をきめてメンバーを引っぱるタイプと、さまざまな不満をなだめるタイプという2つのリーダーが生まれるという。具体的には、職場でも趣味のサークルでもよいのだが、つねに新しい目標を提示して、みんなを駆り立てるのが「道具的」なリーダーの役割である。しかし、目標を達成しようとすれば当然、オーバー・ワークになったり、日のあたる場にいる者といない者との間のあつれき、あるいは、能力差に伴う葛藤が生じてくる。そうした不満を聞いてやり、メンバーの気持ちを柔らげてやるのが「表出的」リーダーの役割となる。

通常、リーダーシップという概念で、前者の役割を連想することが多い。しかし、パーソンズは「道具的」と「表出的」とは、ともに集団を維持するのに不可欠のリーダーなのだという。

「道具的」リーダーのみの集団では、一時的に生産性が上がるにしてもメンバーの不満がうっせきして集団から脱落する者が生じ、

集団内のモラールが低下していく。それに対し「表出的」リーダーの率いる集団は、和が保たれる代わり、新しい目標が提示されないので、やる気に富んだメンバーが離落するだけでなく、活動が全体として停滞しマンネリ化していく。したがって「道具的」と「表出的」のリーダーが相互に役割を補充し合い、それぞれの機能を果たすとき、その集団は安定するというのである。

「道具的」という用語は、なんとも日本語になじみにくいから、思いきって意訳すれば「引っぱり型」とでもいえばよいのだろうか。グループの先頭に立ち、目標を示してメンバーを動機づけるリーダーである。それに対し「表出的」は、メンバーの不満を聞き精神的なやすらぎを与える役割であるから、「なだめ型」と訳せばパーソンズの意に則しているかもしれない。

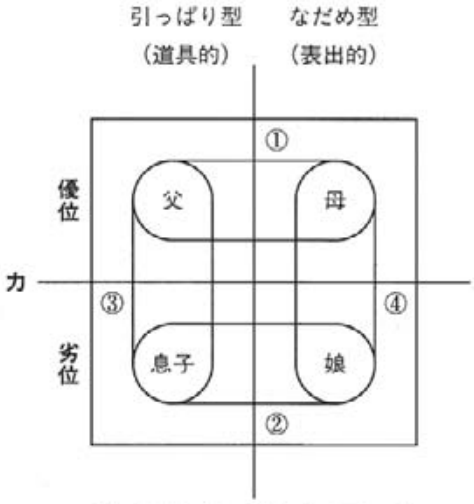
そしてパーソンズは「引っぱり型」(道具的)と「なだめ型」(表出的)という役割分化は、家族の中に典型的にあらわれるとみて、**図1**のような図式を提出している。

図から明らかなように核家族を例にすれば、家族の中には、「おとなたち」(図中の①)「子どもたち」「男性たち」「女性たち」というような4つのタイプの小さな集団がある。そして、家庭内での力の上位・下位という面で、おとなたちと子どもたちの分化が生じ、主たる役割が引っぱり型か、なだめ型かによって男子と女子との役割が分かれる。

そして、家族の中で「引っぱり型の力のある存在」が父親、「なだめ型の力のある存在」が母親となる。したがって、仕事にでて収入を得てくるだけでなく、社会と家庭との間のかけ橋となり、社会的な権威を身につけて、家族を引っぱっていくのが父親の役割で、家

図1　家族の役割構造

—パーソンズ図式—



注) ◯の中に家族の中の下位文化
①＝おとなたち　②＝子どもたち
③＝男性たち　④＝女性たち

事や育児だけでなく家庭のメンバーの不満や悩みを聞いてやり、精神的な安定を与えるのが、母親の役割となる。

こうした人間関係の中で、息子は父を目標とし、父に近づこうとすることによって、男性らしさを獲得し、娘は母親の行動を模倣しながら、母と同じような女性らしさを身につけていく。したがって、両親と息子と娘から構成されている家族があり、それぞれのメンバーが、期待される通りの役割を果たしているなら、その家族は安定しており、そうした家族の中で育つ子どもは、父親から生きる目標を与えられ、母親から充足感を得て、バランスのとれた成長をとげることができる。

自動車の運転にたとえるなら、父親がアクセル役を、母親がブレーキ役を果たしつつ、両者のバランスの上に、家庭生活が進展していくという図式である。

●夫と妻との分業で成り立っていた社会

たしかに、こうした父親と母親との役割分化は、かつての家庭生活を思いおこすと理解しやすいし、それなりの必然性を伴った生活のパターンであった。そして、現在の父親論の多くは、そうした父親と母親との役割の分化を前提として、父親が、パーソンズのいう「道具的」な役割を果たしていない点に、大きな問題を見いだしている。

しかし、現在、そして未来の家庭生活の中で、そうした性に対応した役割の分化が、どの程度の妥当性を持って持続するのかにはかなりの疑問が残る。そして特に日本の場合、現実にも、父親と母親の役割は、かなりの部分重複しかけているような印象を受ける。

しかし、先回りの指摘はさけて、ここでは、父親と母親との役割分業が成り立った背景を概観しておこう。現在でも、狩猟民族の間では、父親が狩りにでて獲物をとり、母親は、住まいの近くに残り、家事や育児に従事しつつ、父親の帰りを待つ生活を送っているといわれる。

日本の場合でも、士族の社会では、男子の家督相続制が厳密に守られていたから、女性は嫡子を産むための存在、つまり腹は借りもの的な評価を与えられがちであった。加えて、男性を「天」、女性を「地」とみるような朱子学の思想が浸透していたから、士族の家庭では、父親と母親との役割が明確に分離していたのみでなく、母親というより女性は、父親に従属する生活を送っていた。「子なきは去る」に象徴される「七去」、「嫁しては夫に従い」の「三従」などの教えが、たてまえとしてではなく、現実の生活倫理として機能していたのである。

もちろん、明治維新を迎えて士族社会の風習は急速に失われていったが、明治時代を担った高級官僚たちが、下級が多いとはいっても、士族出身で占められていたために、士族の流れをくむ父親像は大きな変貌をとげることなく、明治はむろん大正や昭和へとうけつがれることになった。

現在でも、父親の理想像のひとつに、無口で、感情をあらわにせず、毅然たる態度をとる男性の姿がある。そうした父親像の系譜を求めていくと、士族の文化に到達する可能性が強い。

こうした士族の父親像とは別に、もうひとつ庶民の父親像とが考えられる。庶民のモデルを、どこに求めるのかはむずかしいところだが、農民の場合、農作業を統轄する父親の権限、つまり「トトザ」と、家庭内のきりもりをする母親の権限、つまり「カカザ」とを分離する慣習があった。もちろん、女性たちも農作業に従事してはいるが、それとは別に主婦権が認められていたのである。

地域によって呼び名がことなるようだが、その家の農業を経営する実権が、父親から息子へゆずり渡されるとき、それと併行して家政をきりもりする実権が、姑から嫁へ移動する「杓子わたし」が行われる。

杓子とは、当世風にいえばご飯のもりつけを行うしゃもじにあたる。そして、杓子わたしをされた翌日から、嫁はその家の主婦となり、家政の権限のすべてを握る。なにしろ、塩や鉄、油などを除く生活用品を、家庭の中で自給自足していた時代である。特に冬場の長い、東北や日本海辺りなどでは、主婦の力量は一家の生死の鍵すら握っていた。

このように、かつての主婦たちは、家政のきりもりをすると同時に、農業や家業の手伝いをするのが常であったから、専業主婦ではなかった。もちろん、上級士族の流れをくむ家庭や明治の高官の家庭には専業主婦の姿がみられるが、そうした場合は、書生や住みこみの手伝いを指揮して、お邸をきりもりするもので、あくまで上流家庭に限られた現象であった。

丸ビル文化が花を開き、プランタンなどの喫茶店で、昼休みの一刻、コーヒーを飲む。そうしたサラリーマンの登場は、いかにも当世風だが、そば屋などを除くと手軽な食堂のない時代のことゆえ、「腰弁」の名が残っているように、弁当持参の通勤はあたり前の現象だった。その上、ハイカラな背広や靴下は高価なものだったから、そうした衣服のつくろいも、妻の大事な仕事だった。

40代以上の読者なら、あらためて書くまでもないことだが、現在のように家庭用電化製品が出回るまで、ご飯炊きや風呂たき、掃除……のなにひとつをとっても、手間ひまのかかる仕事だった。つまり、夫が社会に出て収入を得、妻が家事に専念するという役割の分担制をとらねば、男性も満足に仕事ができない時代が、ほんの3～40年前まで存在していたのである。

もちろん、そうした性に対応した役割分化は、実質的な必然性があっただけでなく、家制度や男女別の教育制度などによって、社会的にも支えられていたからきわめて強固なものであった。

史的な分析を目的とするのではないので、回顧は簡単にしたいが、ここでふれたかったのは、士族の流れをくむにせよ、あるいは庶民の系譜をひくにせよ、過去に目を向けると、男性と女性、あるいは、父親と母親とが役割を分担して家庭を築いていた姿が映るという事実である。そして、そうした事実をふまえると、先ほど紹介したパーソンズの「道具的」と「表出的」という役割分化論がきわめて妥当のように思われてくる。

●役割の分化は普遍的なのか

パーソンズ以外にも、小集団や家族の研究などを通して、2つのリーダーシップの存在を指摘している学者は多い。例えば、経営学者のバーナードは『経営者の役割』の中で、「有効性」effectivenessと「能率」efficiencyという概念を提出している。この2つのうち、「有効性」は目的達成の観点から、「能率」が充足感の側面からとらえられているので、パーソンズのいう「道具的」と「有効性」、「表出的」と「能率」との概念は類似している。

また、ユング派の心理学者・河合隼雄氏は、『母性社会日本の病理』の中で、母性の原理を「包合する」、父性を「切断する」としてとらえている。すべての子を無条件で愛し、限りなく受け入れ、包み込むのが母性だとするなら、善悪や優劣のけじめをはっきりとさせ、劣った子を切りすて、優れた子を抜てきするのが父性原理だという。こうした発想をさらに発展させ、河合氏は母性を平等主義、父性

を能率主義として要約し、現代を父性の失われた母性優先の社会だとみて、示唆に富む日本社会論を展開している。

先に紹介したパーソンズの図式は、アメリカの社会学者が、さまざまな社会を念頭に置いて作ったものだけあって、一般論としての説得力を持ってはいるが、やや抽象的すぎて、人間の心情などが脱落しているような印象を受ける。それに反し、河合氏の論旨は精神科医の目を通した人間観をふまえており、心のひだにしみ通る思いがする。

その他、母親の役割行動が、文化の違いを越えて共通しているのに、父親の役割はその社会により違いが大きいという文化人類学者マーガレット・ミードの指摘や、出産や育児のような直接的な接触を持たないから、父親の存在は、イマジネーションの産物であるというフロイドの理論もある。

いずれにせよ、これらの父親論は、父親を、母親との対比の中でとらえ、その違いを明確にすることによって、父親らしさを摘出しようとする立場に立脚している。そして、すでにふれたように、過去に基準を求めるなら、そうした理論は、かなりの妥当性を持つといわねばならない。出生してからのしつけ、教育、将来の進路が、男子と女子とで、まったくことなっていたのであるから、そして、男子は社会的な権威を持つように、女子は家庭を守るようにしつけられてきたのであるから、そのように育てられた男女が結婚し、父親と母親になれば、父親が「道具的」になり、母親が「表出的」な態度をとるのも当然であろう。

『タテ社会の人間関係』の著者として知られる中根千枝氏は、文化人類学的な見識をふまえて、父権の成り立つ基盤が、

① 父の仕事を息子が継ぐこと
② 家族の構成人数が多いこと

であるといっている。たしかに、職業の世襲が可能であって、父の持つ技術や知識が息子に伝達できるのであるなら、父親の権限は強まってこよう。また、大家族制度のもとでは、家庭の運営にさまざまな決定や判断を伴うから、父親の出番が多くなろう。

この中根論文を収録した『オヤジ―父なき時代の家族』の中では、中根氏の指摘に続いて戦後日本の父親が権威を失った原因として、

① 人間関係の異常接近―家族サイズが小さくなり、父親が、父親としての権威を保ちにくくなった。
② 生活空間の異常接近―住宅が小さくなり、子どもたちが、素顔の父と接するようになってしまった。
③ 情報の異常接近―マス・メディアの発達により、誰でもが、情報を入手できるようになった。
④ 経済の異常接近―賃金格差がなくなり、誰でも、ある程度の収入を得ることが可能になった。

の4つの「異常接近（コアミス）」をあげている。それぞれに納得できる理由だが、こうした状況は②の住宅環境、③のマス・メディアなど、どれをとっても、ここ当分続くと予想されるものばかりである。したがってこうした前提で論旨を展開するなら、父親の権威は歯止めなしに長期低落傾向をたどると予想せざるを得ない。

しかし、伝統的な父親と母親との役割分化は、過去の社会でそれなりの必然性を伴って登場したものであるとするなら、社会の条件が変わるにつれて、父親と母親との役割も変化するのが当然であろう。

子ども調査の必要があって、大家族制度で知られる飛騨高山の白川郷を訪ねた。昔のままに保存されている家の中に入っておどろいた。なにしろ暗い。それに、薪の煙が目にし

みる。ガラスがないから障子ごしに冷たい風がとびこんでくる。馬はいなかったけれども、馬小屋が家屋と同居しているから、昔はハエも多かったと思う。

なにやら思い出のある雰囲気だと感じ、考えてみたら、戦争中に疎開した農家の家庭に似ていた。つまり、現代のわれわれは、家庭という言葉に暖かいマイホームを連想する。しかし、白川郷に限らず、どこの農村でも家は暗く、寒く、煙かったのであろう。そうした暮らしの苦しさから逃れ、なんとか人間らしい生活をしたいと努力してきた。そしてガラス戸が入り、電気がつき、冷蔵庫と洗たく機を買い、テレビを購入し、ほんのこの20年の間に曲がりなりにもマイホームが誕生したのである。

白川郷で入ったその家は、江戸中期に建てられたという。つまり大づかみにすれば、自然の中で自然のままで暮らしていたという意味では、江戸時代も昭和の20年代もさほど変わらないのであって、それだけこの2～30年の変化が大きいのであろう。

考えてみれば、生活環境だけでなく、ものの見方も大きく変わった。そうだとするなら、父親論を考えるにあたっても、過去に基準を求めるものではなく、新しい世の中をふまえた父親像の提出が必要なのではないだろうか。

そして、このモノグラフ・シリーズでもふれているように、父親と母親の差の少ない家族が増加している。かつての社会が性差を拡大しすぎたとするなら、現代の社会は性差の縮小が進みすぎているようにも思う。そうだとしたら、男の子たちが男の子らしさを見失いがちなのも当然のように思われてくる。

調査レポート
男の子
要　約

目黒区立不動小学校教諭　矢部　崇
東京学芸大学教授　深谷和子

1．目的

思春期の入口にさしかかった「男の子」たちの行動特性や異性意識、自己像、将来展望のスタイル等を女の子を対比させながら明らかにしようとする。

2．男の子のニーズ

ふだん考えていることは「もっと遊びたい、たくさん眠りたい」であり、女の子とも共通である。（図1）

3．男の子の自己像

「友だちがたくさんいて、元気いっぱい、最後までがんばる、スポーツが得意」と子どもらしさそのものである。ただし「女の子にもてないし、ハンサムでもないし、スタイルがよくもない」と異性の視線には自信がなさそうだ。（図2）

4. 理想の自己像

現在の自己像をもうすこし強調したイメージで、理想の自分を描いている。（図３）

5. となりの席になりたい女の子

となりの席になりたい女の子が「いる」と答えた男子は32%(女子は38%)、また学年を追うにしたがって、その割合がふえる。４年生24%、５年生29%、６年生になるとぐっとふえて42%。（図４）

6. バレンタインデーにチョコをもらいたい女の子

「いる」と答えた男子は４年生24%、５年生26%、６年生で40%とふえていく。（図６）

7. どんな子と友だちになりたいか

男子の選ぶ同性の友人は「話が合って、おもしろく、親切」、女子が求める男の子の友だち像とほとんど同じである（図９）。また友だちになりたい異性の友人（女の子）像も、ほとんど同じで、「親切、話が合って、おもしろい」である。しかし学年が上がるにつれて、容姿やハンサム、かわいいといった要素が異性、同性であるを問わず、友人について評価されるようになる。（表12、表13）

要　約

8. 男の子が言われると傷つく言葉

「バカ」のほか、「ちび」「デブ」「短足」など身体に関することが多い。（表10）

9. 今一番熱中していること

男の子が熱中しているのは「スポーツ、友だちとの遊び、マンガ」であり、好きな遊びは「テレビゲーム、ドッジボール、サッカー、野球」である（表4、表5）。好きな遊びはおにごっこや砂場遊びのような幼児的な遊びから、スポーツへと変化していく。スポーツも、ドッジボールからバスケットボールへと本格化していくが、女の子は「おしゃべり、マンガ」と室内化していく。（表6）

10. 異性に負けたくないこと

「体育、根性、口げんか、行動の速さ」が上位にくる。女子は「字をていねいに書く、整理整頓、音楽、根性」と、根性を除いては早くも意識の中で性役割が生じているかのようである。（図12）

●調査概要

1．**調査主題**　男の子

2．**調査視点**　行動特性や異性意識、自己像、将来展望などを女の子と対比させることにより、思春期の人口にさしかかった男の子の姿を探っていく。

3．**調査項目**　自分をどんな子と思うか、どんな男の子・女の子の友だちが好きか、となりの席になりたい子、バレンタインデーにチョコをもらいたい子、女の子(男の子)に負けたくないと思うこと、など。

11. 将来像

「幸せな家庭を作りたい」「よい親になりたい」が男子女子とも1位、2位で、3位は「仕事での成功」である。（図13）

12. 結婚したら

男子は家庭内の役割分担を「ときどきやるつもり」くらいの意識しかなく、女子はそれ以上に「ときどきやってもらうくらいでよい」と考えている。性役割はもう十分にでき上がっている。教育のひずみではないのだろうか（図14）。しかも「できるだけやる」積極派は、学年の上昇と共にむしろ減少していく。（図17）

13. 男の子はどうあるべきか

「強いだけではダメ。女子に親切でなくては」と女子は強く望んでいる。その期待に応えるという課題の下で、男子にとってきびしい時代が到来してきている。また男子の中には「こうあるべき自分」のイメージが女子ほどは明確ではないかのようである。（図18）

4．調査時期　1991年3月

5．調査対象　東京、千葉、埼玉の小学4・5・6年生

6．調査方法　学校通しによる質問紙調査

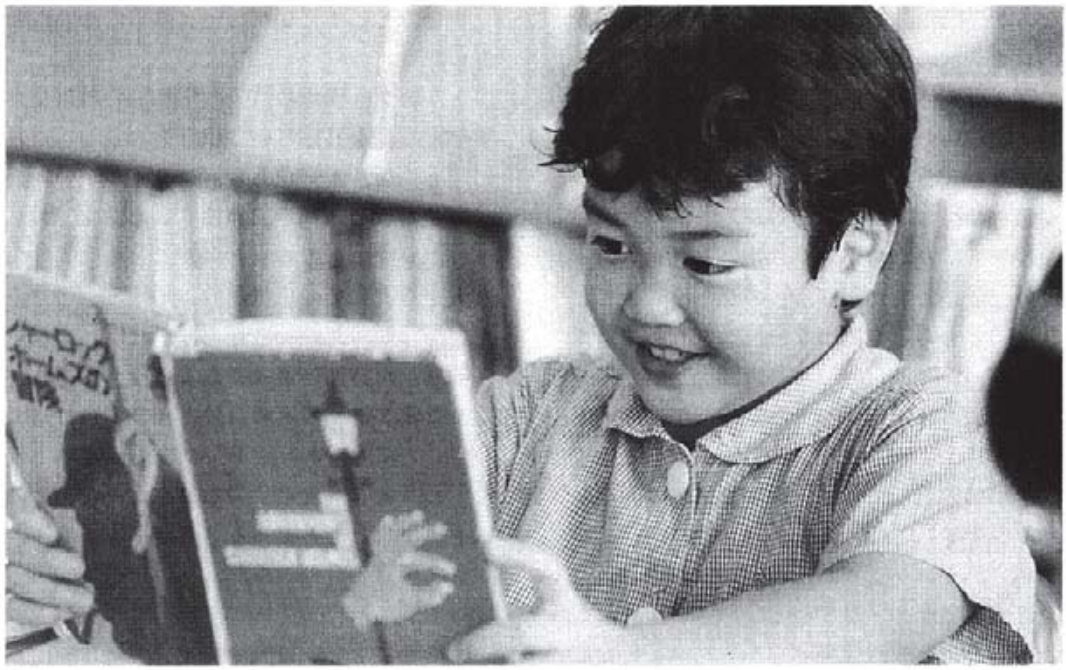
7．サンプル数　（人）

学年／性	男　子	女　子	計
4　年	237	212	449
5　年	262	246	508
6　年	272	261	533
計	771	719	1,490

はじめに

「モノグラフ・小学生ナウ」では、過去、「異性の友だち(Vol. 2－6)」「男の子・女の子(Vol. 10—6)」などで、男子と女子のかかわり合いについてふれてきている。また、その他の各号にみられるように、男女差を比較したデータ処理も数多く行ってきている。男子と女子は、それぞれ共通する部分も多いが、発達段階の途中から生理機能や社会的期待のちがいから行動や意識上に差も生じはじめる。本号では、そのような男女差、あるいは男女比較の中で、とくに思春期の入口にある「男の子」とは何かについて探っていこうとした。

1．男の子・女の子



■自分自身について

一般に公立小学校では、教室の中に男女約20名ずつの子どもたちがおり、互いに協力し合いながら生活し、学習している。しかし、先に挙げた２つのレポートが共に提言している内容によると、クラス全体の人数は40人であっても、その中に20人ずつの男組・女組が存在していると言っていいほど、男女の接触の機会は少ないとされている。互いを近づき難い状況にしている要因は一体何なのか。

まず**図１**は、子どもたちがふだん生活している中で、何を考えているかの結果である。勉強に追われているのか、男女共「もっと遊びたい」「たくさん眠りたい」がそれぞれ50％以上を示している。遊ぶ時間や睡眠時間を削らなければならないほど、子どもたちの生活には余裕がなく、何かに圧迫されているかのようである。下にまとめたように、順位でみると大きくちがうのは、男子のほうで「体が疲れる」という声である（３位）。昔のイメージでは女子の感じ方であっただろうに。また女子は「おしゃれ」を３位にしているが、男子には７位と関心がない。しかし両性とも「異性の友人がほしい」が下位にきているのはなぜだろう。

〈男子〉	〈女子〉
１．もっと遊びたい	１．もっと遊びたい
２．たくさん眠りたい	２．たくさん眠りたい
３．体が疲れやすい	３．おしゃれをいっぱいしたい
４．早くおとなになりたい	４．早くおとなになりたい
５．忙しい	５．忙しい
６．女の子の友だちがほしい	６．体が疲れやすい
７．おしゃれをいっぱいしたい	７．男の子の友だちがほしい

この年齢の子どもたちの中の、こうした不自然にも思える異性への関心の希薄さはなぜなのか。「男組・女組があるかのようだ」の先のレポートの指摘が改めて思い出される。また**図2**は両性の自己像である。「スポーツが得意、頭がいい」が男の子を特徴づけ、「親切、きまりを守る、異性とたくさんしゃべる」が女子を特徴づけていることがわかる。しかし両性とも「友だちがたくさんいる、元気いっぱい、最後までがんばる」のが上位にきており、子どもらしく健康な自己像をもっていることがわかる。

また**表1**は学年差をみたものだが、「スポーツが得意、先生と仲がよい、きまりを守る」が次第に低下していき、逆に異性への関心を示す「異性とよく話す（女子のみ）、スタイルがいい、ハンサム（かわいい）、女子（男子）にもてる」がわずかずつではあるが上昇している。ただし表には掲げなかったが、男女別に学年差をみると、「異性とよく話す」はとくに女子のほうが学年と共に上昇するが、男子は横ばいに近く、消極的である。第2次性徴の発現と同じく女子のほうが意識的にも一足先におとなになるのだろうか。

図3は「理想とする自己像」だが、現実の自己像と大差はなく、全体に現実を少しふくらませた形となっている。男子より女子のほうが全体として「なりたい」欲求の強いこともわかる。

また**表2**は理想の自分の学年別の結果だ。学年と共に上昇している項目をみると「だれにでも親切、人気がある、スタイルがいい、ハンサム(かわいい)、異性とよく話す、おしゃれ、異性にもてる」と、友人とくに異性の友人を意識しての項目が並ぶ。残る1つ「みんなから頼られる」も見方によれば、これらと関連した特性と言ってもよさそうである。

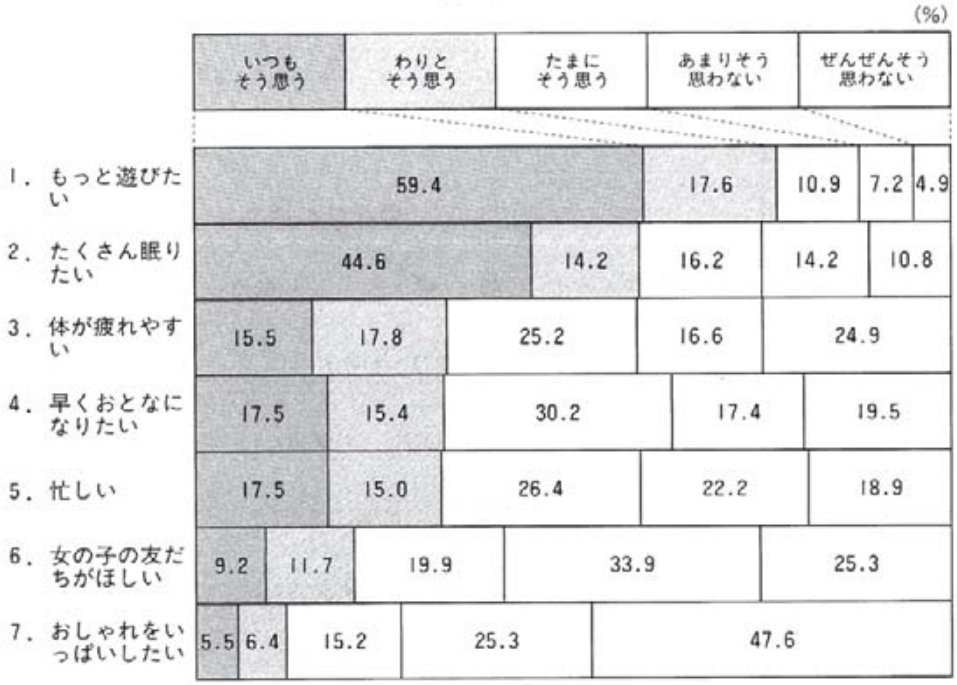
また**表3**は、現実の自分と理想の自分について「とても・わりとあてはまる」と「とても・わりとなりたい」の数値をとって、その比を算出したものである。表が示すように、現実と理想の自分の差が大きい項目は、男子では、

①異性にもてる自分
②ハンサムな自分
③スタイルのいい自分

であり、女子とも全く同様である。こうしてみると彼らの中に容姿への関心と自信のなさ、それも異性を意識している状態が見いだせる。

図1　ふだん考えていること

〈男　子〉



〈女　子〉

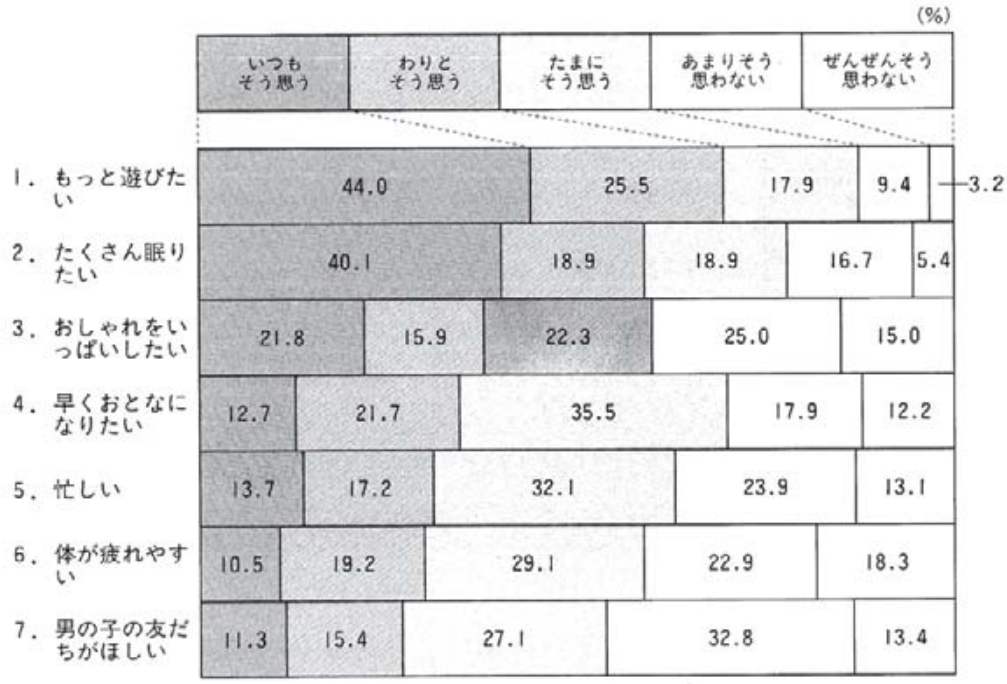
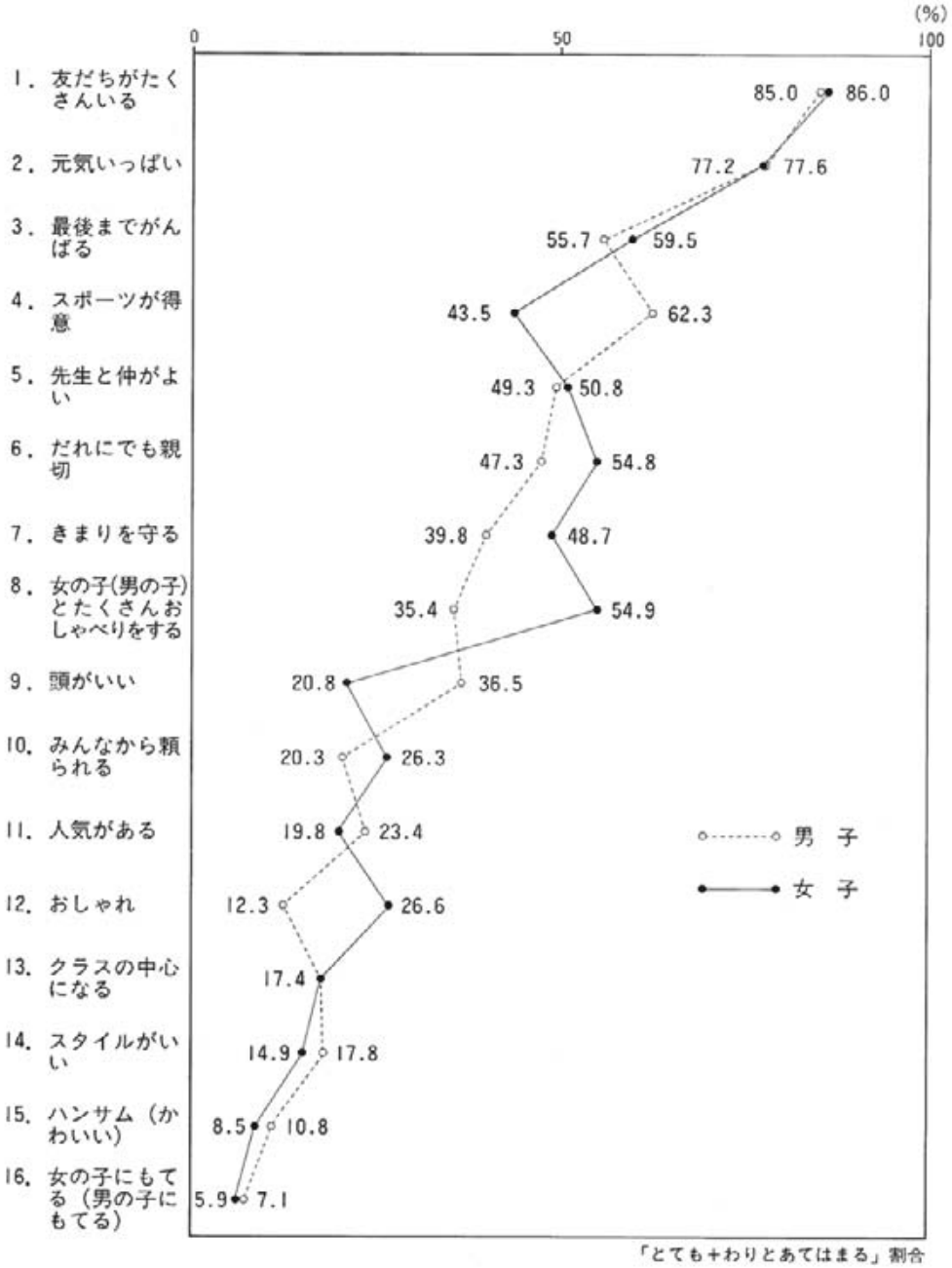


図２　現在の自己像×性別



「とても＋わりとあてはまる」割合

表1　現在の自己像×学年

(%)

	4　年	5　年	6　年	変化
1．友だちがたくさんいる	85.6	85.5	85.2	
2．元気いっぱい	79.8	76.2	76.6	
3．最後までがんばる	59.6	58.0	55.3	
4．スポーツが得意	56.9	52.4	51.0	★
5．先生と仲がよい	57.3	48.9	45.0	★★
6．だれにでも親切	51.2	50.5	51.0	
7．きまりを守る	48.9	43.2	41.0	★
8．女の子とたくさんおしゃべりをする （男の子とたくさんおしゃべりをする）	36.0 (49.3)	35.4 (57.1)	34.9 (57.3)	☆
9．頭がいい	26.8	30.7	29.0	
10．みんなから頼られる	21.4	22.3	25.5	
11．人気がある	21.3	22.6	21.1	
12．おしゃれ	18.0	16.6	22.8	
13．クラスの中心になる	14.6	18.0	19.2	
14．スタイルがいい	14.5	14.5	19.7	☆
15．ハンサム （かわいい）	8.4 (7.1)	8.8 (10.2)	14.7 (8.0)	☆
16．女の子にもてる （男の子にもてる）	4.6 (5.2)	5.8 (6.1)	10.7 (6.2)	☆

「とても＋わりとあてはまる」割合
変化は、4年から6年までの変化。☆1つで＋5%
★1つで－5%

図３　理想とする自己像×性別

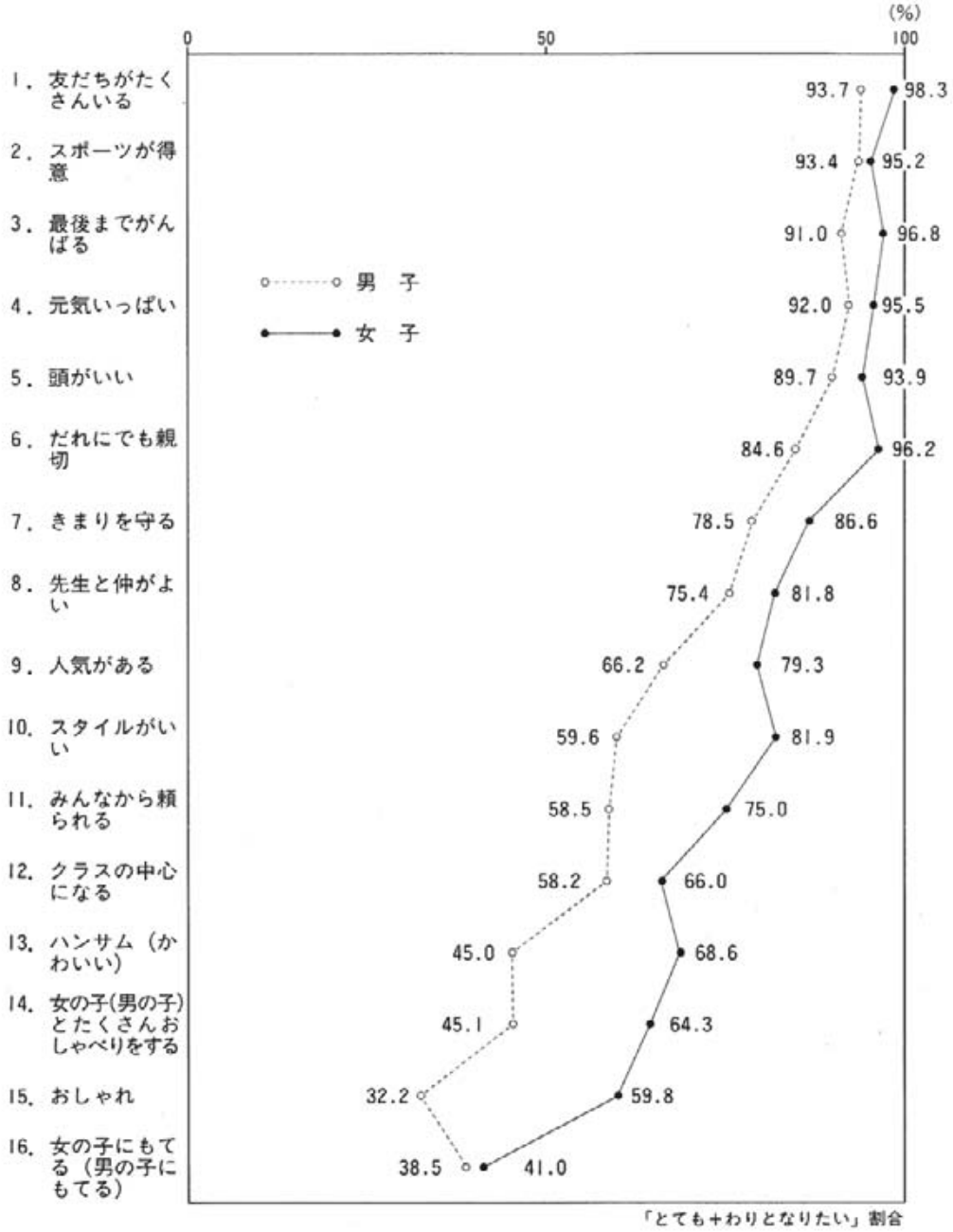


表2　理想とする自己像×学年

(%)

	4　年	5　年	6　年	変化
1．友だちがたくさんいる	95.1	96.2	96.3	
2．スポーツが得意	94.4	93.7	94.5	
3．最後までがんばる	92.4	93.7	95.1	
4．元気いっぱい	93.9	93.5	93.8	
5．頭がいい	89.7	92.3	92.9	
6．だれにでも親切	86.8	90.8	92.4	☆
7．きまりを守る	82.8	86.1	78.4	
8．先生と仲がよい	82.9	78.4	74.9	★
9．人気がある	67.0	73.5	76.2	☆
10．スタイルがいい	60.2	70.8	78.5	☆☆☆
11．みんなから頼られる	59.7	67.9	70.8	☆☆
12．クラスの中心になる	60.0	63.7	61.9	
13．ハンサム	27.1	48.7	57.0	☆☆☆☆☆☆
（かわいい）	(59.8)	(63.8)	(80.0)	☆☆☆☆
14．女の子とたくさんおしゃべりをする	41.0	44.8	48.8	☆
（男の子とたくさんおしゃべりをする）	(58.9)	(61.0)	(71.8)	☆☆
15．おしゃれ	36.0	42.2	56.9	☆☆☆☆
16．女の子にもてる	24.8	39.8	49.0	☆☆☆☆
（男の子にもてる）	(32.6)	(37.8)	(51.0)	☆☆☆

「とても＋わりとなりたい」割合
変化は、4年から6年までの変化。☆1つで＋5％
★1つで－5％

表3　自分自身についての理想と現実の格差*×性別

	男　子	女　子
1．友だちがたくさんいる	1.10	1.14
2．スポーツが得意	1.50	2.19
3．最後までがんばる	1.63	1.63
4．元気いっぱい	1.19	1.24
5．頭がいい	2.46	4.51
6．だれにでも親切	1.79	1.76
7．きまりを守る	1.97	1.78
8．先生と仲がよい	1.53	1.61
9．人気がある	2.83	4.01
10．スタイルがいい	③3.35	③5.50
11．みんなから頼られる	2.88	2.85
12．クラスの中心になる	3.34	3.79
13．ハンサム （かわいい）	②4.17 ／	／ ①(8.07)
14．女の子とたくさんおしゃべりをする （男の子とたくさんおしゃべりをする）	1.27 ／	／ (1.17)
15．おしゃれ	2.62	2.25
16．女の子にもてる （男の子にもてる）	①5.42 ／	／ ②(6.95)

＊理想と現実の格差＝$\frac{\text{理想とする自己像}}{\text{現在の自己像}}$

円内数字は、男女別で項目格差の多い順位、3位まで

生活のスタイル

次に男の子のふだんの生活を見ていこう。**表4**は現在一番熱中している活動である。男子は1位がスポーツ、2位が友だちとの遊び、次にマンガが続く。4位以下は数値がぐっと低くなるが、中では5位と6位に「勉強」がきている。女子もほぼ同様の傾向だが、男子より「おけいこごと」が上位にきている点が多少ちがっている。いずれにせよ、「異性のこと」「タレント等への関心」「おしゃれ」に一番熱中している者の割合はごく低いことがわかる。そして表の下の欄には、「今熱中している活動がない」者の割合を示したが、男子女

表4　今一番熱中していること

(%)

	男　子		女　子	
第1位	スポーツ	(45.6)	友だちとの遊び	(41.5)
2	友だちとの遊び	(45.4)	スポーツ	(26.6)
3	マンガ	(28.4)	おけいこごと	(22.5)
4	クラブ活動	(15.3)	マンガ	(22.4)
5	塾の勉強	(14.9)	クラブ活動	(21.0)
6	学校の勉強	(14.3)	学校の勉強	(17.0)
7	自分の仕事	(10.1)	塾の勉強	(13.2)
8	おけいこごと	(4.2)	自分の仕事	(12.9)
9	女の子のこと	(4.2)	おしゃれ	(11.3)
10	芸能人	(2.4)	男の子のこと	(9.4)
11	おしゃれ	(1.7)	芸能人	(9.4)
	熱中していることがない	(13.6)	熱中していることがない	(12.8)

複数選択、サンプル全体の中の割合

子共13%前後がそう答えており、気にかかる。

では、彼らはその「(友だちとの) 遊び」では、いったい何をしているかを、**表5**にまとめた。表4の「スポーツ」に熱中している者が多いイメージとはちがって、まず1位が「テレビゲーム」(79%) であることに驚く。やや、ひところのブームが去った感のあるテレビゲームであるが、新しいゲームが発売され続けていることを考えると、その人気は根強い。2位以下には、さすがにスポーツが並び、2位に「ドッジボール」(67%)、3位「サッカー」(63%)、4位「野球」(63%) となっている。女子の遊びが1位「おしゃべり」、2位「トランプ」、3位「マンガ」など室内遊び傾向が強いことを考えると、テレビゲームを除いてはスポーツ好きの男の子の活発さが見えてくる。しかしテレビゲームも、多くのソフトは「敵をやっつける」タイプであることを考えると、身体を動かさなくても男子の心理的なレベルの中でも「活動性」を示す結果とも言えそうだ。

表6は学年別データである。4年生と6年生をとってみると、全体としては「おにごっこ」「砂場遊び」のような幼児的遊びが減っていく傾向が見いだされ、またスポーツでは、「ドッジボール」から「バスケットボール」へと、スポーツが本格化していく傾向も見いだされる。これに対して女子は「おしゃべり」「マンガ」がふえていくのが男子とちがっている。

ではスポーツ欲求の代償行為とも見なせる「テレビでよく見るスポーツ番組」を見てみよう。**表7**によれば「プロ野球」「高校野球」「サッカー」が50%を超えており、次いでプロレス、ゴルフ、すもうと続く。それに対して女子は50%を超えるものが「バレーボール」だけであり、男子の上位10傑に入っていない種目として「水泳、テニス、体操、バスケットボール」とソフトなタイプのスポーツが特徴だ。逆に男子のほうに入っている種目は「プロレス、ゴルフ、すもう、ラグビー、ボクシング」であり、激しいスポーツ (またはたぶん父親に感化された) が特徴である。

ついでに**表8**は、好きなプロ野球チームをたずねた結果である。「とくにない」者は男子にも8%いるが、女子は34%と多い。好きなチームは巨人、西武が両性とも圧倒的で、3位以下は順位はつけたものの、大差なくそれぞれである。

同じく遊び欲求の1つであるマンガを、好きなテレビマンガという形で聞いてみたのが**表9**である。9割近くの男子が見ているという圧倒的人気の「ドラゴンボール」(90%)。アラレちゃんでおなじみの「Dr. スランプ」は同じ鳥山明氏の作品だが、子どもたちに人気の『少年ジャンプ』にも掲載されている上、同氏のマンガが、テレビゲームのソフト、ドラゴンクエストシリーズのキャラクターとなっていることなどをあわせて考えると、「闘い」をテーマとしているこのマンガが、男の子の心をつかまないはずがない。今までの男子についてのデータをふり返ってみてくると、「ドラゴンボール」の人気は、起こるべくして起こったものと考えられる。

「ドラゴンボール」以下のマンガは、「ドラえもん」「ちびまる子ちゃん」「サザエさん」と続く。また、それに続く「平成天才バカボン」「おぼっちゃまくん」「もーれつア太郎」といった、ギャグマンガが男の子には好まれるという傾向もみることができる。

いずれにせよ、男の子は、スポーツ、そして闘争、あるいは痛快なギャグというような、刺激の強いものを好むようであり、それによって、フラストレーションの解消をしていると考えてよいかもしれない。

表5　自分が好きな遊び(上位10傑)

(%)

	男　子		女　子	
第1位	テレビゲーム	(78.9)	おしゃべりしている	(61.6)
2	ドッジボール	(66.8)	トランプ	(60.1)
3	サッカー	(63.3)	マンガを読む	(55.3)
4	野球	(62.5)	バスケットボール	(51.1)
5	マンガを読む	(58.6)	ドッジボール	(41.2)
6	自転車のり	(47.9)	テレビゲーム	(37.0)
7	バスケットボール	(45.4)	自転車のり	(36.3)
8	トランプ	(32.7)	マンガ、イラストをかく	(35.9)
9	マンガ、イラストをかく	(32.0)	なわとび	(34.7)
10	かけっこ・リレー	(30.0)	かけっこ・リレー	(27.7)

□ はスポーツ
複数選択

表6　好きな遊びの変化（4年と6年）

(%)

	男子			女子		
	4年	6年	変化	4年	6年	変化
1．バスケットボール	35.0	49.8	☆☆☆	50.0	47.7	
2．マンガ、イラストをかく	28.2	34.3	☆	31.1	38.0	☆
3．自転車のり	47.9	49.4		40.6	31.8	★
4．おしゃべりしている	21.8	22.3		42.9	74.0	☆☆☆☆☆☆
5．トランプ	34.2	37.0		66.0	57.8	★
6．野球	60.3	61.1		14.2	18.2	
7．マンガを読む	59.0	59.2		44.3	66.7	☆☆☆☆
8．サッカー	62.8	61.5		21.2	27.5	☆
9．鉄棒・ジャングルジム	10.7	8.7		23.6	14.0	★★
10．かくれんぼ	21.8	17.7		31.6	16.3	★★★
11．テレビゲーム	82.1	78.9		34.9	39.1	
12．おにごっこ	25.6	20.8	★	32.1	19.4	★★
13．砂場	13.7	6.8	★	5.2	5.8	
14．木登り	26.5	17.4	★	27.4	19.4	★
15．かけっこ・リレー	33.3	22.3	★★	29.2	21.7	★
16．なわとび	23.5	9.8	★★	49.5	21.3	★★★★★
17．虫取り	26.1	10.6	★★★	8.5	7.8	
18．ドッジボール	76.5	59.6	★★★	38.2	39.5	

変化は、4年から6年までの変化。☆1つで＋5％
★1つで－5％

表7　よく見るスポーツ番組(上位10傑)×性別

(%)

	男　子		女　子	
第1位	プロ野球	(78.4)	バレーボール	(58.7)
2	高校野球	(60.1)	プロ野球	(47.1)
3	サッカー	(57.0)	スキー	(45.2)
4	プロレス	(40.3)	水泳	(39.7)
5	ゴルフ	(33.3)	テニス	(37.1)
6	すもう	(33.2)	陸上競技	(34.8)
7	スキー	(32.5)	高校野球	(34.2)
8	ラグビー	(29.5)	体操	(33.9)
9	ボクシング	(28.1)	サッカー	(30.0)
10	陸上競技	(27.7)	バスケットボール	(26.2)

複数選択

表8　好きなプロ野球チーム×性別

(%)

	男　子		女　子	
第1位	巨人	(60.3)	巨人	(49.5)
2	西武	(49.8)	西武	(26.5)
3	中日	(18.0)	広島	(9.7)
4	近鉄	(14.8)	ヤクルト	(7.1)
5	阪神	(12.9)	中日	(6.3)
6	オリックス	(12.0)	阪神	(4.7)
7	ヤクルト	(10.8)	近鉄	(4.5)
8	大洋	(7.7)	オリックス	(3.6)
9	ダイエー	(7.2)	大洋	(2.0)
10	日本ハム	(6.7)	日本ハム	(1.7)
11	ロッテ	(5.0)	ダイエー	(1.1)
12	広島	(3.6)	ロッテ	(1.1)
	とくにない	(7.7)	とくにない	(33.8)

印パ・リーグ
複数選択、サンプル全体の中の割合

表9　好きなテレビマンガ×性別

(%)

	男　子		女　子	
第1位	ドラゴンボール	(89.7)	ちびまる子ちゃん	(82.5)
2	ドラえもん	(69.4)	ドラゴンボール	(63.4)
3	ちびまる子ちゃん	(62.6)	サザエさん	(60.3)
4	サザエさん	(52.1)	ドラえもん	(50.9)
5	平成天才バカボン	(50.9)	私のあしながおじさん	(49.4)
6	おぼっちゃまくん	(44.9)	チンプイ	(46.5)
7	もーれつア太郎	(42.8)	まんが日本昔ばなし	(28.7)
8	まんが日本昔ばなし	(29.9)	平成天才バカボン	(21.5)
9	チンプイ	(25.6)	ジャングル大帝	(14.4)
10	ジャングル大帝	(22.4)	おぼっちゃまくん	(14.3)
11	私のあしながおじさん	(16.4)	もーれつア太郎	(11.3)
12	三丁目の夕日	(8.3)	三丁目の夕日	(10.0)

複数選択

2．友だちとの関係

■ 気になる女の子 ||||

はじめにふれたように、教室の中では男組・女組が分かれているにせよ、彼らはお互いに接触の機会を持たなければならない。またお互いに嫌い合っているわけではなく、思春期的な特性が、異性への関心を「反発」という形で表出している部分もありそうだ。それは先にみた学年差のデータも示していた。本章ではそうした対異性行動とでも名づけることのできる側面のデータを見ていくことにしよう。

図4はとなりの席になりたい女の子について、男の子にたずねた結果である。どうやら、3人に1人の割合で(32%)、そういう女の子の存在を認めている。そして、学年が上がるにつれて、その傾向は高まり、6年生になると、5人のうち2人は、となりの席になりたい女の子がいると回答している。たいていはその相手は1人であるが、2人、3人、またはそれ以上の女の子ととなりの席になりたいとする（気の多い）男子も4割はいる。女子はそれが一層顕著であり、5割を超えている。また「いる」と答えた者の割合も、どの学年でも男子を上回っており、女子の異性に対する関心の強さを示している（**図5**）。

次に**図6**、**図7**は同様の内容について、「バレンタインデーにチョコをもらいたい人」(女子はあげたい人）という形でみようとしたものだ。これを見ると男子で「いる」と答えたのは3割。実際はもっと多くの割合でやり取りが見られるのだが、その多くは遊びだったり、義理だったりするのかもしれない。それに比べると女子で「あげたい男の子がいる」と答えた者は4割に達する。

図4　となりの席になりたい女の子が（男子）

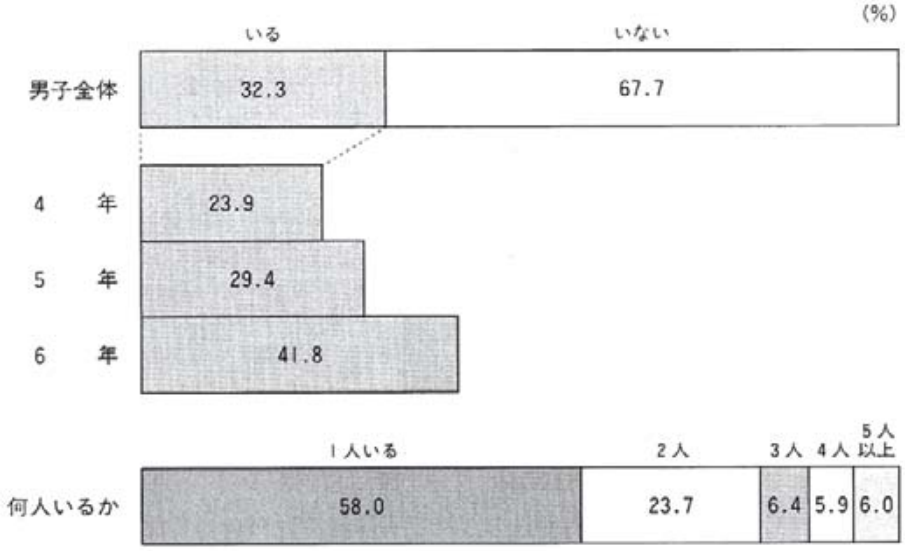


図5　となりの席になりたい男の子が（女子）

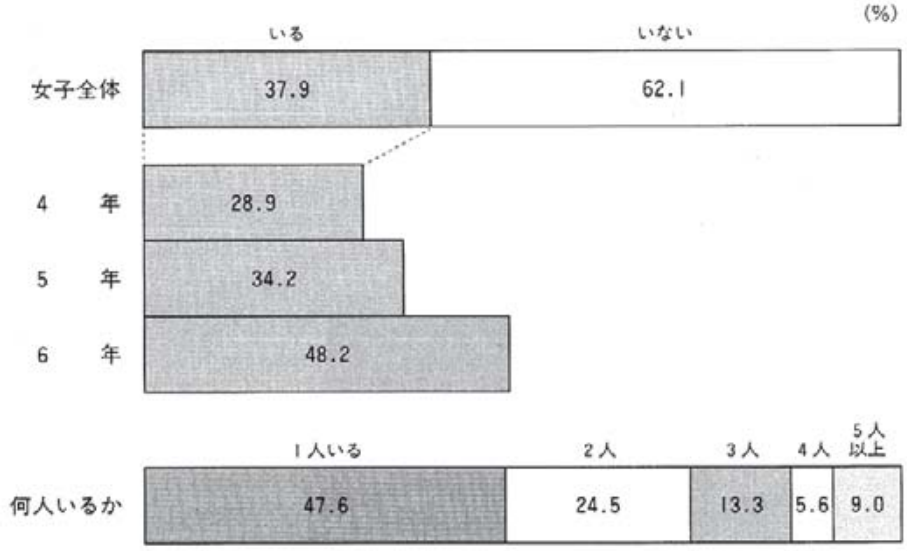


図6　バレンタインデーにチョコをもらいたい女の子が（男子）

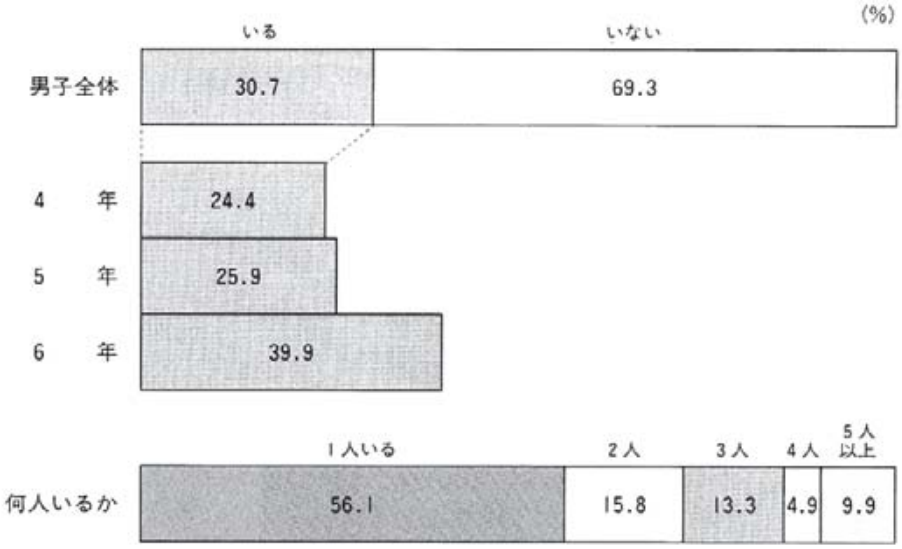
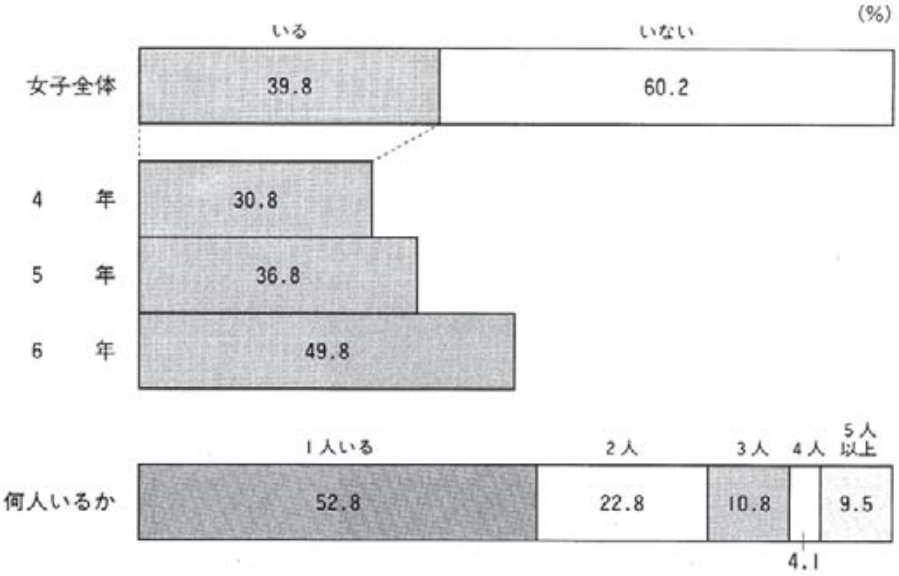


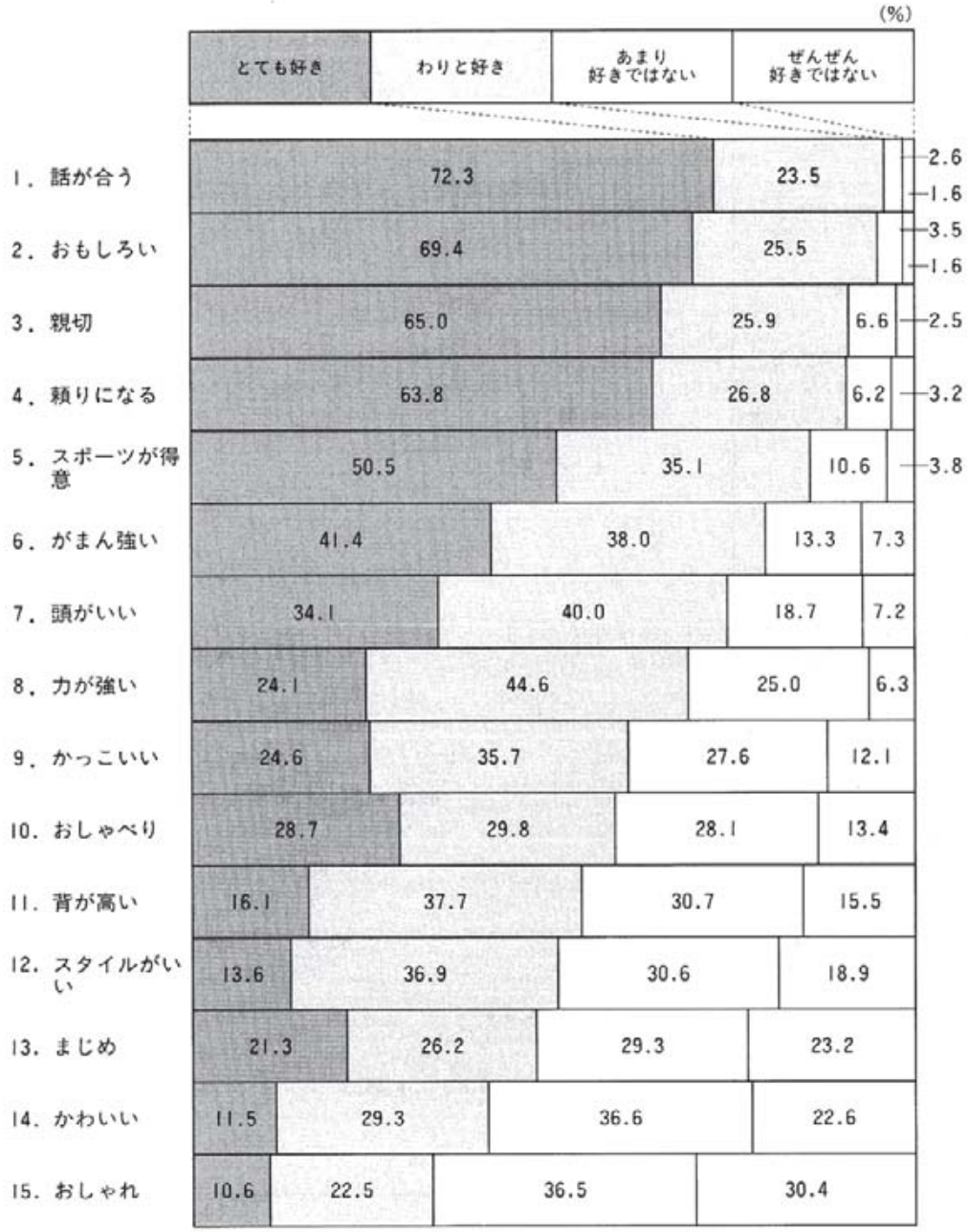
図7　バレンタインデーにチョコをあげたい男の子が（女子）



■友人観

次に図8は好きな同性の友人である。「話が合う、おもしろい、親切、頼りになる、スポーツが得意」が5割を超えている。それを図9から女子（「異性の友人」となる）と比較し

図8　男の子が選ぶ「男の子の友だち」

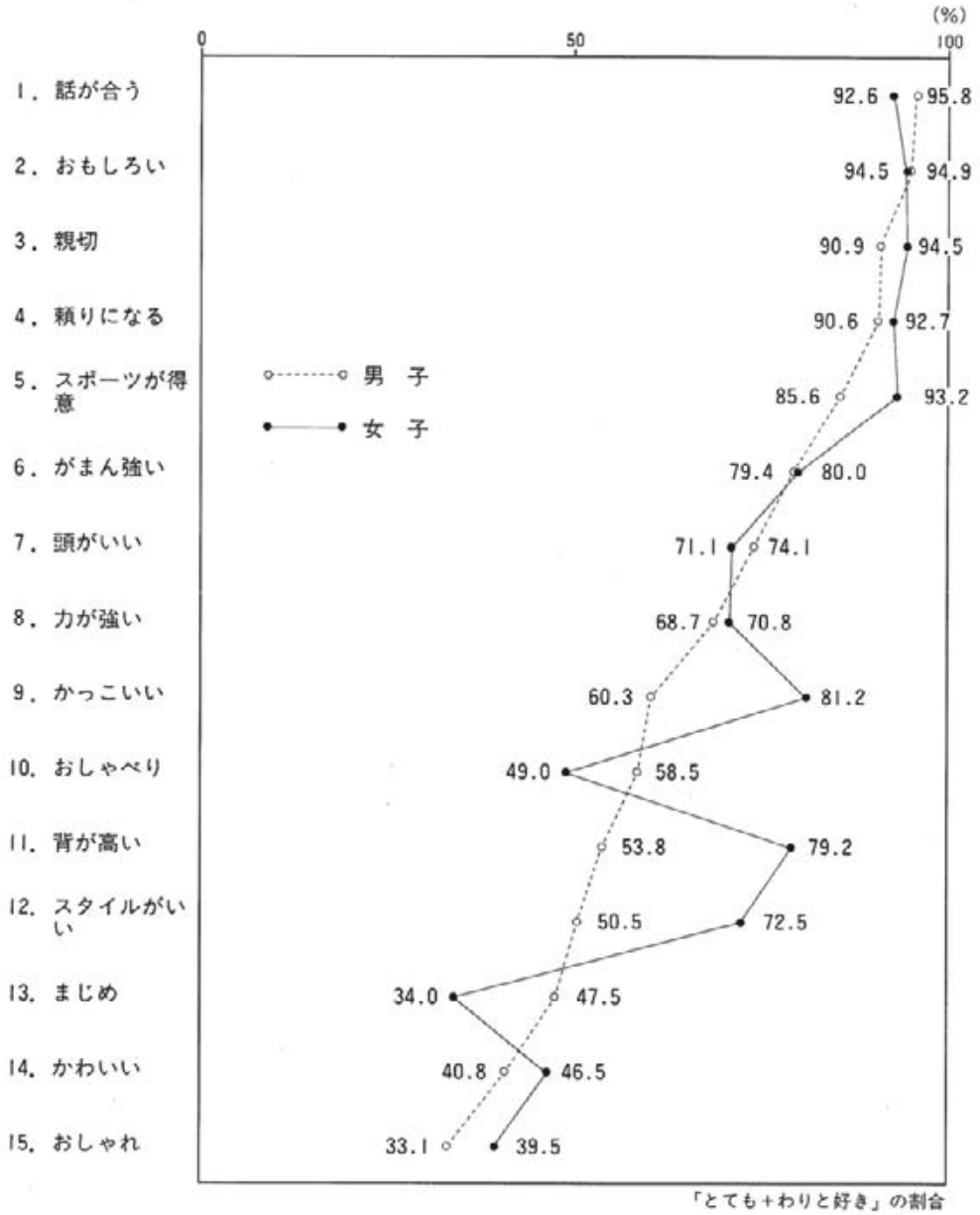


てみた。上位はほとんど差がないが、女子のほうが評価する項目は「かっこいい、背が高い、スタイルがいい」であり、見た目のよさを異性に求める傾向が表れている。

同様な内容のデータとして**表10**を見よう。「女の子に言われて傷つく言葉」を自由記述の中から100人分抽出して示してある。

表が示すように「バカ」が100人中28人でトップ。しかし、「バカ」という悪口は、意外に平気で出てしまう言葉で、何でもかんでも「バカ」と言っていれば済んでしまうくらいの、いわば、悪口の代名詞である。しかし、2位以下の「ちび」(同17人)、「デブ」(同12人)、「短足」(同9人)などは、本人の背が低かっ

図9　どんな男の子の友だちが好きか×性別



たり、本人が太っていたりしなければ言われない、「選ばれた悪口」であり、しかも外見的な判断による悪口である。「へた」とか「もたもた」「なさけない」と言われても、体のことを言われるよりは、マシなのである。もちろん、女の子もそれを知っていて、「バカ」のあとには、「ちび」(同15人)、「かっこ悪い」(同13人)、「短足」(同８人)、「デブ」(同８人)などの、男の子の体のことについての悪口、つまり、外見での悪口を言うようにしているらしい。もちろん、「弱虫」や「いくじなし」といった、心への中傷もあるが、それ以上に、はっきりと目に見えるもので悪口を言うということである。しかし、「弱虫」や「いくじなし」は、性格的なものもあるが、ちょっと勇気を出してきっかけを作れば、なんとかなるものだが、「ちび」や「短足」は、本人の努力だけで一朝一夕に解決できないだけに、辛い悪口であることは否定できない。事実、女子もそれをちゃんと知っているようである(**表11**)。

表10　男の子が女の子に言われて「傷つく言葉」(100人抽出)

(人)

バカ	28
ちび	17
デブ	12
短足	9
変態	5
きたないな	5
うるさいわね	4
へたね	3
もたもたするな	2
情けない	2

表11　女の子が男の子に言う「傷つける言葉」(100人抽出)

(人)

バカ	18
ちび	15
かっこ悪い	13
短足	8
デブ	8
最低	7
弱虫	6
いくじなし	3
嫌い	3
きたないな	2

異性とのかかわり方

男子はどんなタイプの異性の友人を求めているのだろうか。そしてそれは、女子が女子の友人を評価するのとどこがちがっているのだろうか。

図10は男子が求める「女の子の友だち」像である。「とても・わりと好き」をとると、「親切」「話が合う」「おもしろい」が上位3つの特性で、7割かそれを上回る。続いて4位に「頼りになる」、5位に「かわいい」がきている。「頭がいい」「スポーツが得意」も結構評価されており、「かわいい」以外は同性の友人に対する評価と大差はない。それを性別で比較したのが**図11**である。特性の順位はほぼ同様だが、全体に女子のほうが「とても・わりと好き」と肯定する傾向が見られる。男子は女子にくらべて同性の友人の具体的イメージははっきりしているが、異性の友人についてはまだりんかくがそれほどできていない傾向が（前に見た図9「同性（男の子）で好きな友人のタイプ」と比較しても）明らかである。

表12はこの点を学年別にみた結果であり、**表13**にはそれと対比させるため、図9の結果を学年別に示した結果を掲げた。

表12によると、男子は「力が強い」を除く全ての項目で学年を追って次第に数値が上昇していることがわかる。中でも「かわいい」は4年生の39%、5年生で62%、6年生では76%と大幅な上昇をみせる。同様な項目としては「スタイルがいい」33%、56%、66%、「おしゃれ」26%、43%、58%とセックス・アピールにつながる項目が並んでいる。はじめから全体に評価の数値の高い女子のほうでは男子ほどの数値の上昇は見られないものの、同様な傾向を示す項目としては、同性に対しても「おしゃれ」が47%、59%、70%、「かっこいい」が45%、52%、65%と外見の評価がやはり大幅な上昇を見せている。

同様な傾向は表13にも見いだされる。女子にとっての理想の異性像として学年と共に上昇するのは、やはり外見の評価で「かっこいい」74%、80%、89%、「背が高い」69%、80%、86%、「かわいい」41%、39%、59%、「おしゃれ」31%、39%、47%となっている。そしておもしろいことに表12と同様、ここでも男子は同性の友人に対しても「ハンサム（かわいい）」31%、43%、47%、「おしゃれ」23%、32%、43%と、表12の女子同様、外見評価がふえていく。

こうした状況の中で男女が同じ教室で生活していれば当然接触が生じ、互いに「負けたくないこと」も出てくるだろう。**図12**はその点をみたものである。男子が女子に「最も負けたくない」のは「体育の勉強」（運動能力や体力であろう）であり、次いで「最後までがんばる」「口げんか」「行動の速さ」「算数の勉強」となり、いずれも「絶対・できれば負けたくない」者が6割を超える。逆に負けてもいいのが「おしゃれ」「音楽の勉強」「整理整頓が上手」「字をていねいに書く」であるらしい。

逆に女子が負けたくないのは「音楽の勉強」「字をていねいに書く」「整理整頓が上手」「人に親切にする」で、男子と最も大きな差が見いだされる。「最後までがんばる」「行動の速さ」も高い数値だが、これは男子も高く、両性が互いに負けたくないと競い合っている特性とも言えそうだ。

図10　男の子が選ぶ「女の子の友だち」

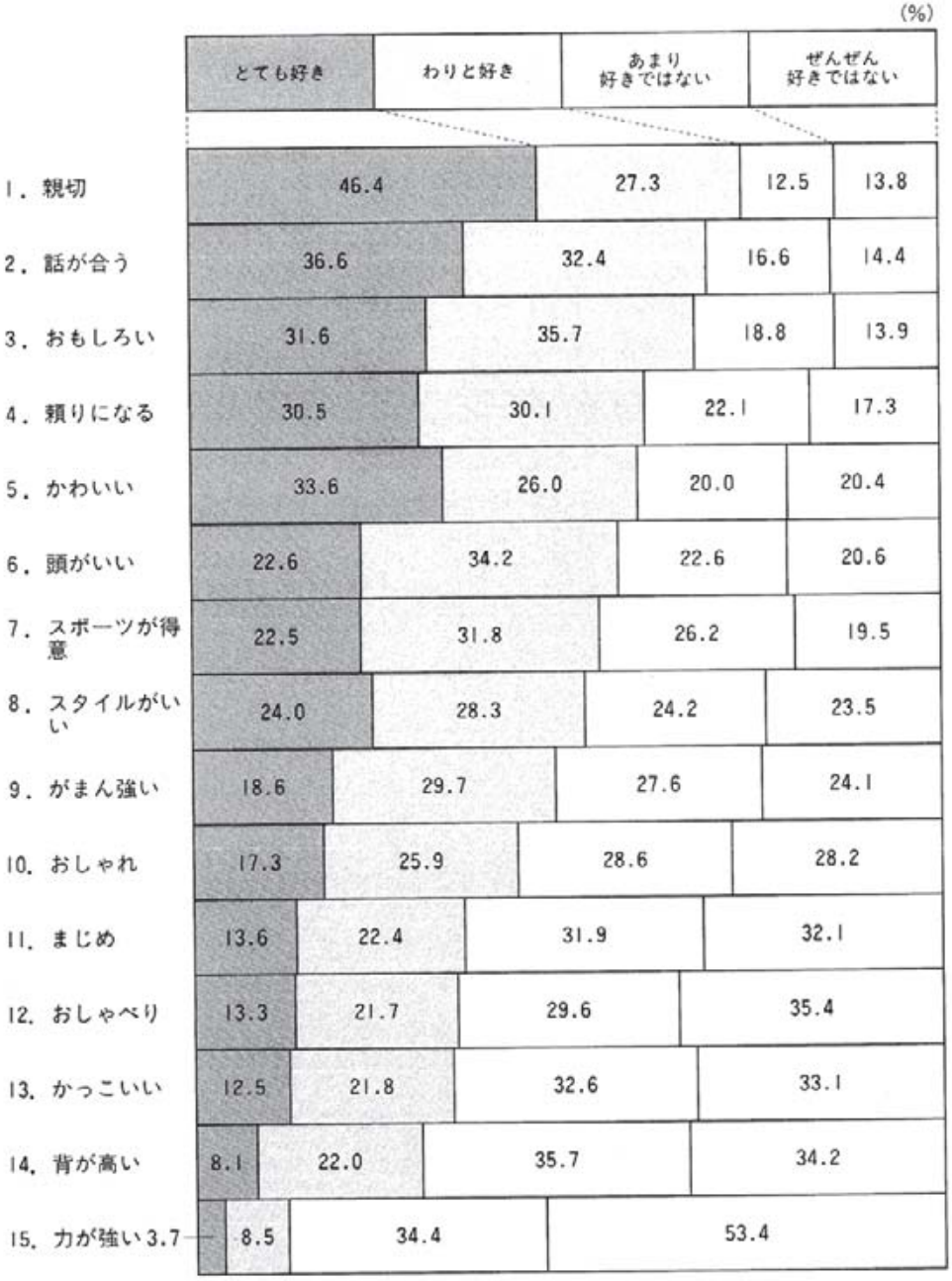


図11　どんな女の子の友だちが好きか×性別

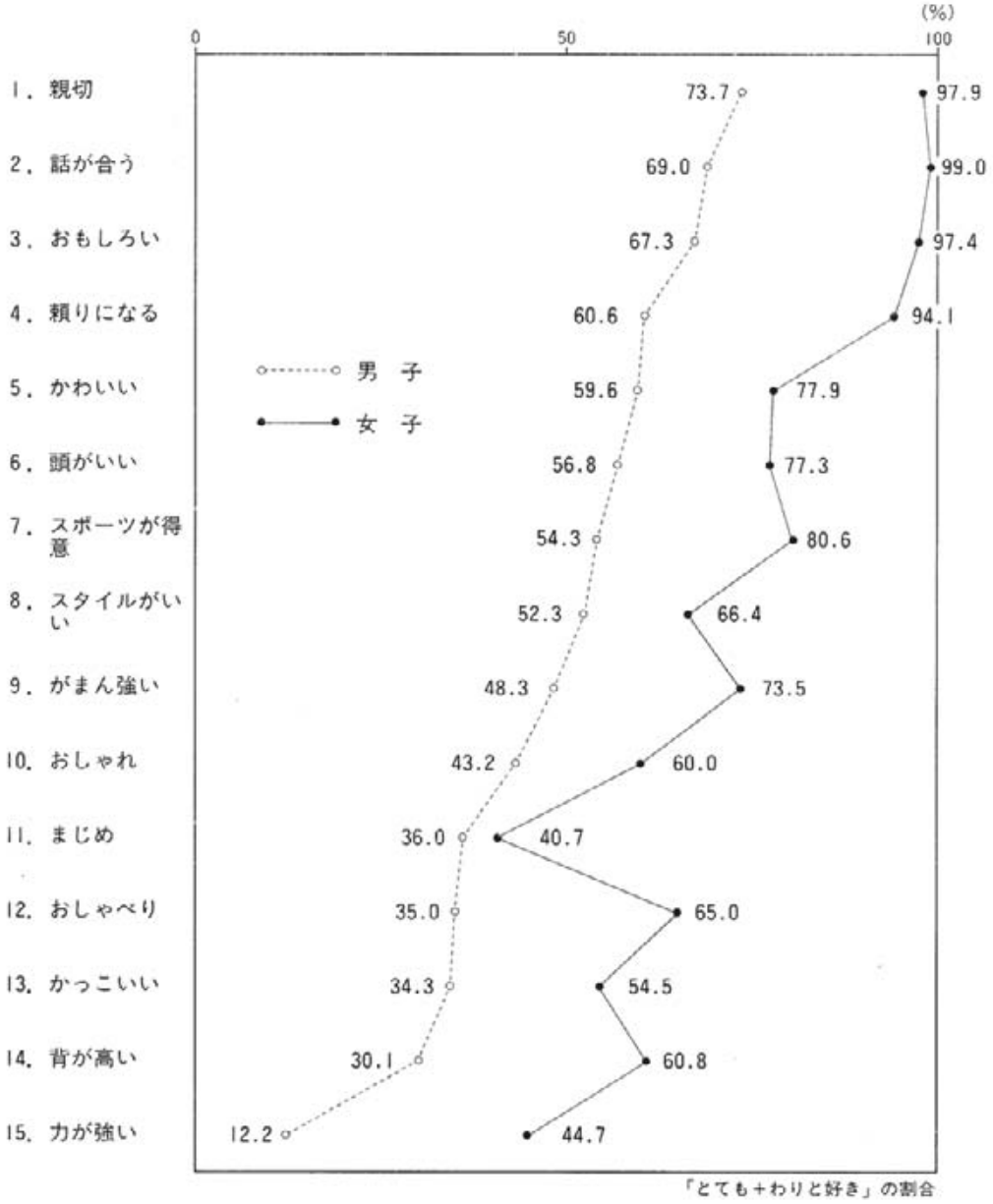


表12　どんな女の子の友だちが好きか×学年

(%)

	男子(異性)				女子(同性)			
	4　年	5　年	6　年	変化	4　年	5　年	6　年	変化
1．親切	60.2	75.2	85.4	☆☆☆☆☆	98.1	97.2	98.5	
2．話が合う	52.3	70.9	81.9	☆☆☆☆☆☆	98.1	99.6	99.2	
3．おもしろい	55.7	73.6	71.5	☆☆☆	96.6	96.8	98.5	
4．頼りになる	53.5	63.9	65.3	☆☆	90.0	93.1	98.5	☆
5．かわいい	38.9	61.5	76.1	☆☆☆☆☆☆☆	74.2	76.8	82.0	☆
6．頭がいい	49.6	60.1	59.1	☆☆	78.4	75.1	78.7	
7．スポーツが得意	45.5	55.0	61.1	☆☆☆	79.0	81.2	81.4	
8．スタイルがいい	32.6	56.0	65.9	☆☆☆☆☆☆	63.8	67.7	67.3	
9．がまん強い	39.0	39.4	55.5	☆☆☆	65.2	71.9	81.7	☆☆☆
10．おしゃれ	26.2	43.2	57.9	☆☆☆☆☆☆	47.1	59.4	69.5	☆☆☆☆
11．まじめ	29.1	40.2	37.9	☆	47.9	38.4	37.1	★★
12．おしゃべり	25.7	38.2	40.0	☆☆	60.5	67.1	66.9	☆
13．かっこいい	28.0	35.6	38.2	☆☆	45.3	51.7	64.7	☆☆☆
14．背が高い	24.5	24.2	31.1	☆	53.4	60.0	67.7	☆☆
15．力が強い	13.5	12.4	10.7		40.5	44.9	48.1	☆

「とても＋わりと好き」の割合
変化は、4年から6年までの変化。☆1つで＋5%
★1つで－5%

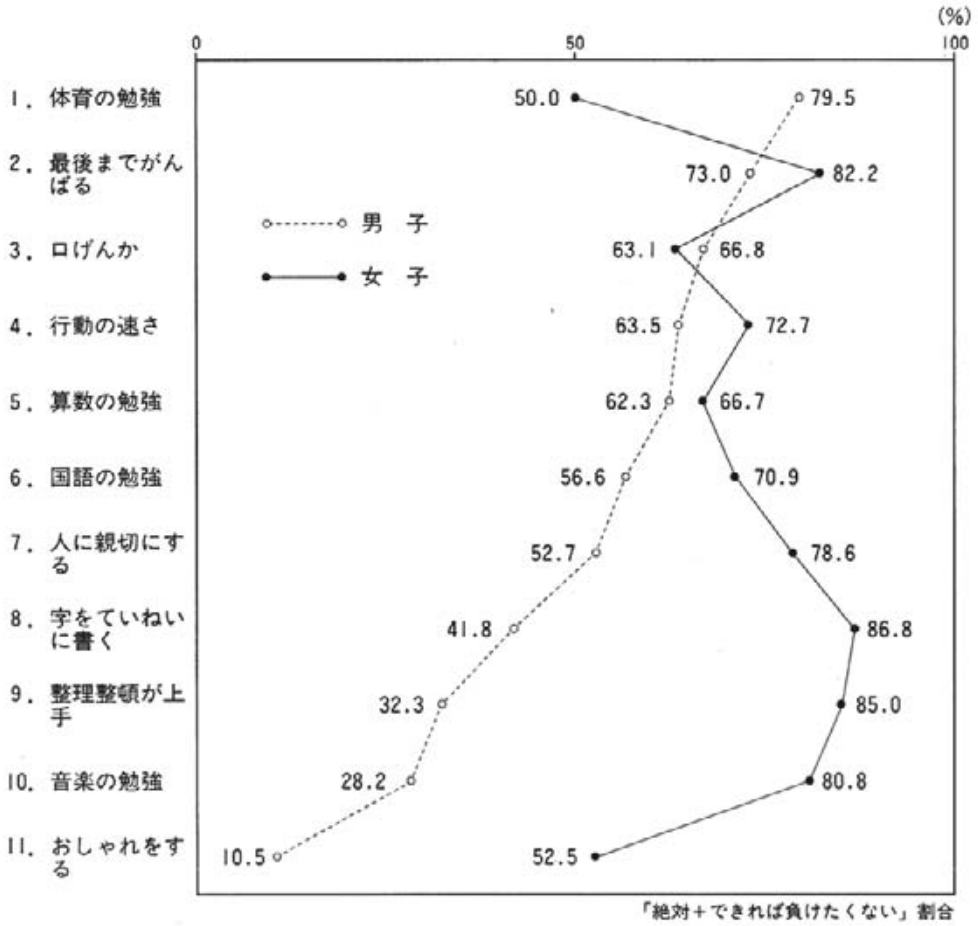
表13　どんな男の子の友だちが好きか×学年

(%)

	男子(同性)				女子(異性)			
	4　年	5　年	6　年	変化	4　年	5　年	6　年	変化
1．話が合う	95.4	95.8	96.3		88.1	90.6	98.0	☆☆
2．おもしろい	94.5	94.2	95.9		90.6	95.1	97.3	☆
3．親切	86.9	92.8	92.6	☆	93.8	93.1	96.5	
4．頼りになる	89.1	90.5	91.9		92.5	89.9	95.8	
5．スポーツが得意	85.6	87.4	83.7		91.5	93.8	93.8	
6．がまん強い	72.2	80.5	84.5	☆☆	73.3	81.2	84.2	☆☆
7．頭がいい	77.2	72.9	72.6		74.1	71.1	68.7	★
8．力が強い	64.6	70.8	70.5	☆	67.1	68.9	75.6	☆
9．かっこいい	56.8	58.8	65.0	☆	73.5	80.1	88.7	☆☆☆
10．おしゃべり	56.5	56.9	61.9	☆	40.9	50.5	54.1	☆☆
11．背が高い	49.4	51.7	59.6	☆☆	69.0	79.7	86.0	☆☆☆
12．スタイルがいい	41.4	54.1	54.9	☆☆	66.0	70.8	79.4	☆☆
13．まじめ	51.0	46.2	45.7	★	44.5	31.3	28.3	★★★
14．かわいい	31.3	43.4	46.6	☆☆☆	40.6	38.8	58.5	☆☆☆
15．おしゃれ	23.0	32.1	43.1	☆☆☆☆	31.3	38.7	46.9	☆☆☆

「とても＋わりと好き」の割合
変化は、4年から6年までの変化。☆1つで＋5％
★1つで－5％

図12　互いに負けたくないこと×性別



3．その将来展望

■将来の暮らし

さて子どもたち一人ひとりの中には、自分の将来について、それぞれ夢や展望があるはずだ。男の子の中には何があるか、のぞいてみることにしよう。

表14は「将来つきたい職業」である。10位までをとり出してみると、アンダーラインを引いた「店の経営、マンガ家、警察官、医師」以外は男女の間で項目を異にする。現在の生活のスタイルや行動パターン以上に、子どもたちの中にある自分の将来像には差があるようだ。とくに3位の「会社社長」が示すように、人の上に立つ欲求、または自立の欲求が高いことが男子に特徴的である。もっともこれはおとなのモデルの有無とも関連していて、女子の先輩にはそうした職業人が見当たらない（割合が少ない）ことにもよるのだろう。単純に女子に「大志がない」かのような評価をしてはならないと思われる。

次に**図13**は将来の生活についての「望み」である。ここでは性差が僅少で、「幸せな家庭を作りたい」「よい親になりたい」「仕事で成功したい」がほぼ9割かそれ以上。「有名人になりたい」は意外にも最下位である。しかし僅差にせよ男子には「仕事で成功、お金持ちに、有名人に」が多く、女子には「幸せな家庭、よい親に、大学へ行きたい、尊敬されたい」が多い傾向にある。男子のほうが野望に富む傾向は、平成の今日も多少ではあるが残っていると言えそうである。

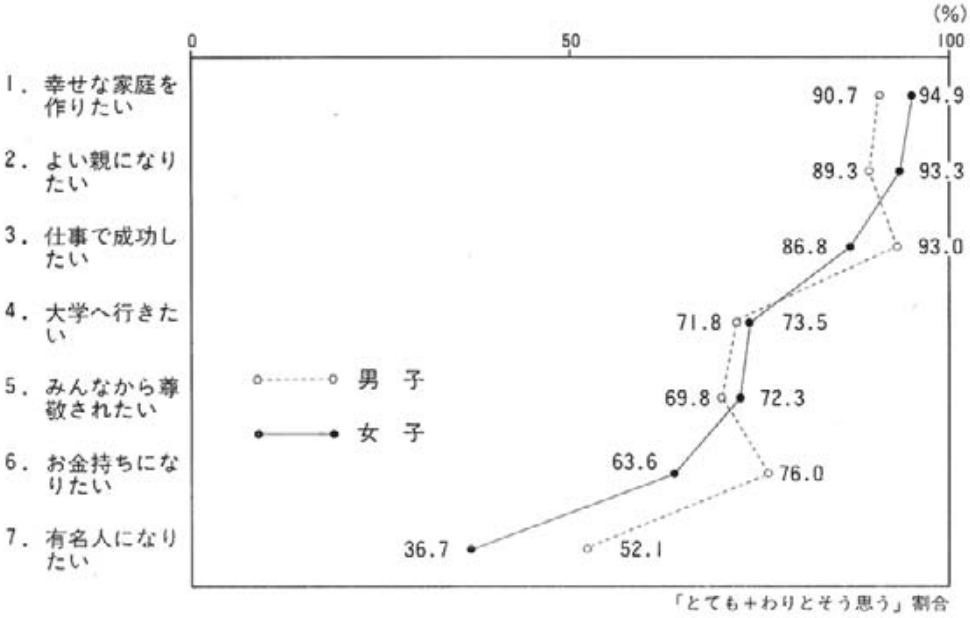
表14　将来の職業について（上位10傑）

(%)

	男　子		女　子	
第1位	プロスポーツ選手	(43.0)	幼稚園の先生	(53.3)
2	自分で店を経営	(34.6)	デザイナー	(37.9)
3	会社社長	(27.8)	看護婦	(29.9)
4	マンガ家	(23.0)	学校の先生	(28.2)
5	サラリーマン	(22.7)	自分で店を経営	(27.5)
6	科学者	(20.3)	歌手、タレント	(25.1)
7	パイロット	(18.4)	小説家	(22.1)
8	警察官	(17.2)	マンガ家	(20.2)
9	医師	(14.5)	婦人警官	(16.2)
10	電車の運転士	(12.1)	医師	(13.4)

＿＿は共通項目

図13　将来の生活について×性別



「とても＋わりとそう思う」割合

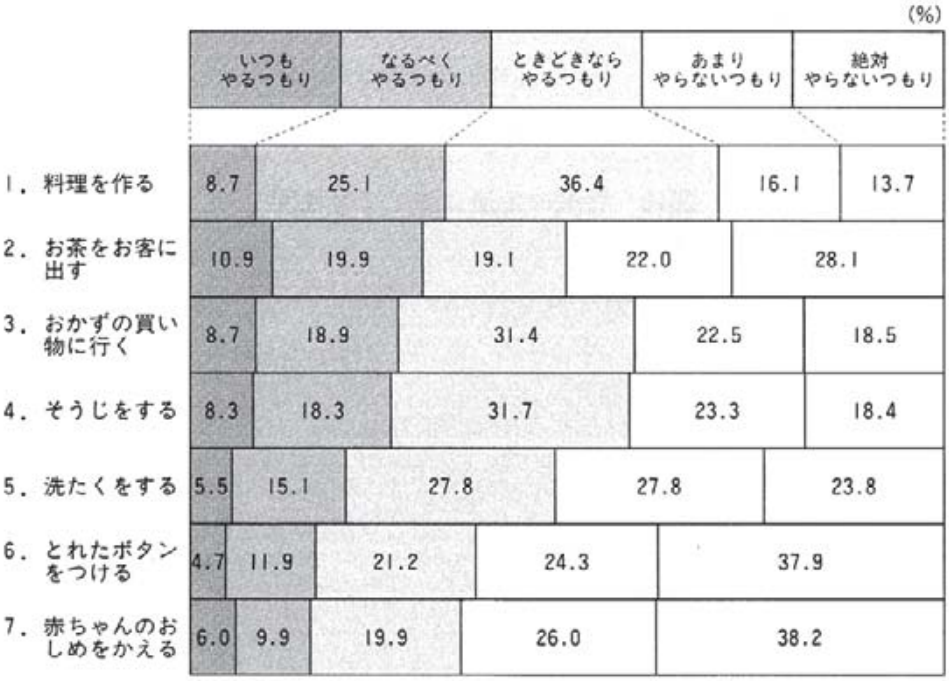
■ 結婚したら||||

ではもう少し具体的に、結婚したら家庭生活の中で彼らはどんな役割を果たそうとしているのだろうか。

図14にそれを示した。男子が「いつもやるつもり」になっている家事は残念ながらごくわずかである。しかしそれでも「なるべくやるつもり」を合わせると、図の大小順となる。1位が「料理」で34%、2位が「お茶をお客に出す」31%、3位が「買い物」28%、4位が「そうじ」の27%。どう見ても低い数値である。これが全ての項目で100%近くなるのはいつだろうか。なにしろ「なるべくやるつもり」を含めた数値なのである。意識と構えの上だけでも100%に近づかなければ、男女共同参加型社会は作れないのではなかろうか。

では女子は男子に何を期待しているか。**図15**にそれを示した。一見して女子の男子に対する期待は一段と低い。それを明確にするために**図16**を作成した。「いつも・なるべく」の数値を男女で比較してみると、「赤ちゃんのおしめをかえる」以外の項目では、男子が「いつも・なるべく」したいと思う割合より、な

図14　結婚したとき、男の子がするつもりになっている家庭内の役割分担



ぜか女子の側で期待している割合のほうが低いのである。例えば、料理を「いつも・なるべく」作ろうと決心している男子は34%だが、そう望んでいる女子は18%でしかない。同じく「お茶をお客に出す」も31%に対し11%である。なぜ女子が性役割を過度に受容しているのかわからない。「かわいい」と言われたいための受容なのだろうか。これはどう見ても女子の意識に問題があるという以外にはなさそうである。

また図17は男子について、4年と6年で家事分担の構えがどう変化するかをみようとしたものである。図が示すように全ての項目で「いつも・なるべく」分担しようとする者の割合が低下している。これは教育——家庭教育と学校教育、社会教育のいずれにせよ、教育のゆがみの結果ではなかろうか。

しかし「ときどきなら」する（してほしい）を含めると、状況は図16図17とも多少変わってくる。中には男子より女子の期待が上回る項目もいくつかでてくるし、学年の上昇につれて男子の中での受け入れもよくなる項目がわずかだが見いだされる。つまり「いつも・なるべく」家事分担をする気はないし、期待もしないが、「ときどきなら」多少はしていいし、女子もその程度を望んでいることがわかる。困ったものである。基本的に家事は女性の役割で、男性はそれを「手伝う」存在という認識しかないのだろう。これからの時代にそれでは生活していけないであろうことに、子どもは気づいていないのではないか。

図15　結婚したとき、男の子にしてほしい家庭内の役割分担

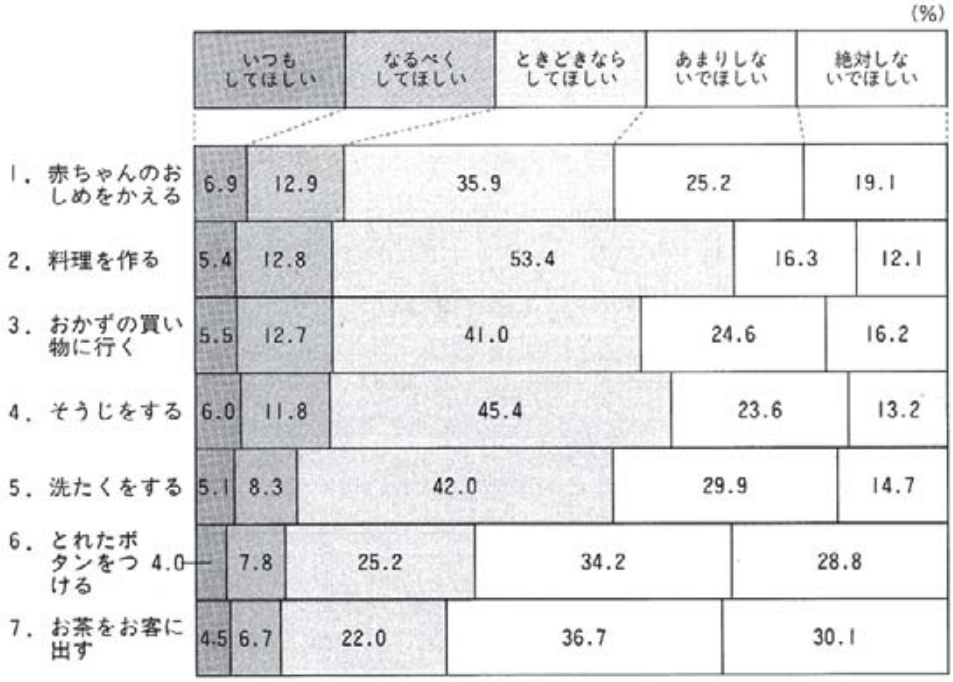


図16　結婚後の男子の家庭内役割×性別

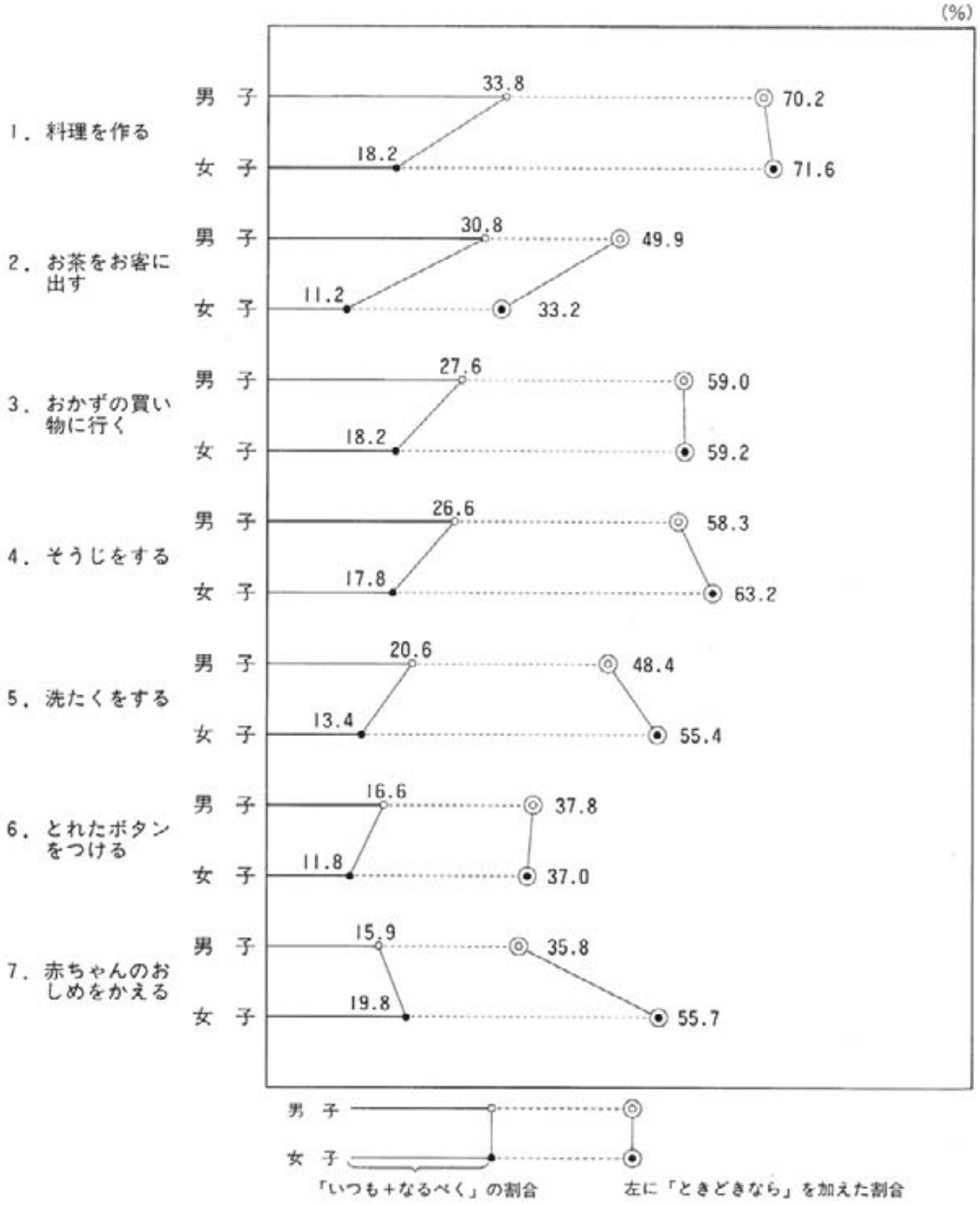
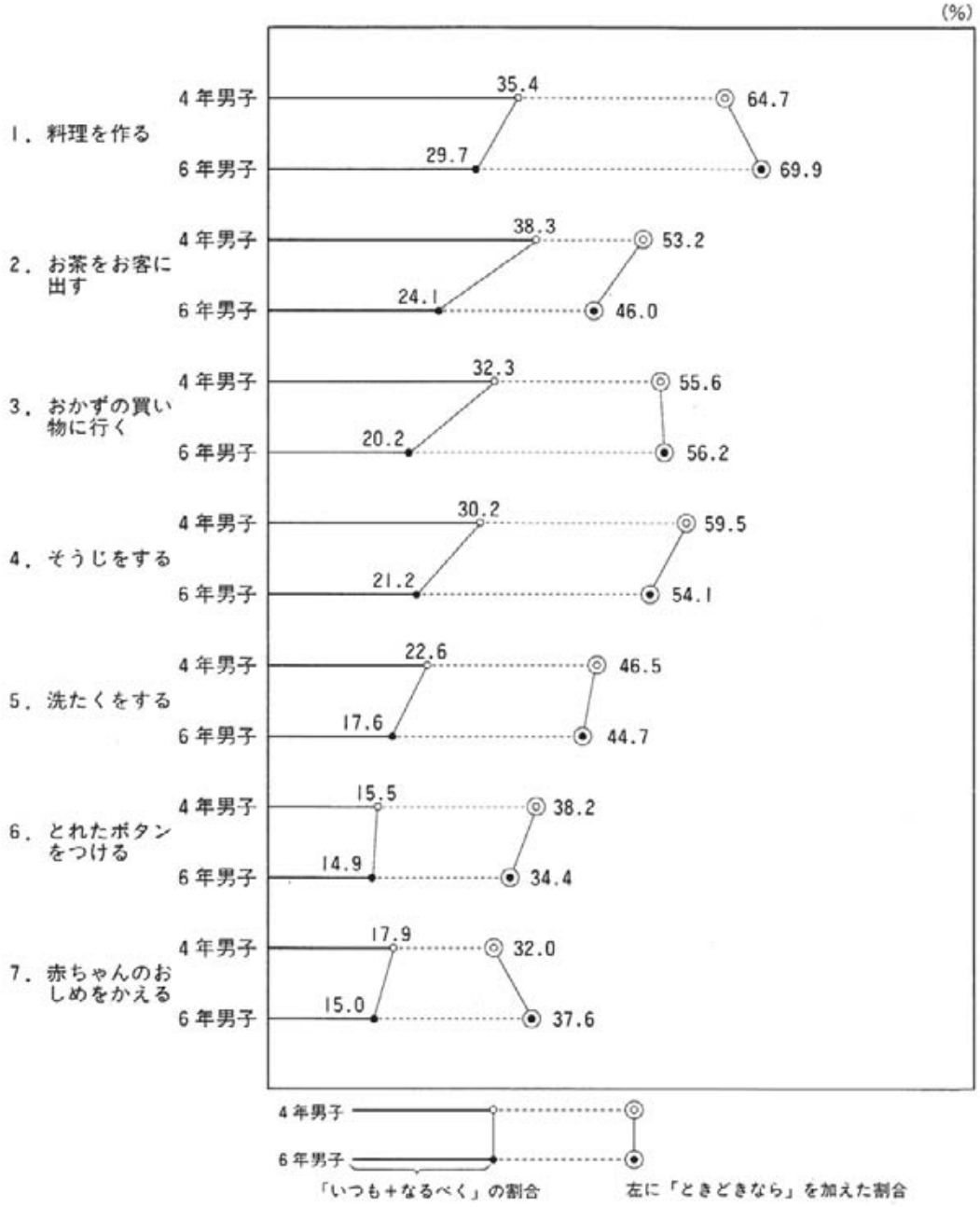


図17　結婚後の男子の家庭内役割×学年（男子）

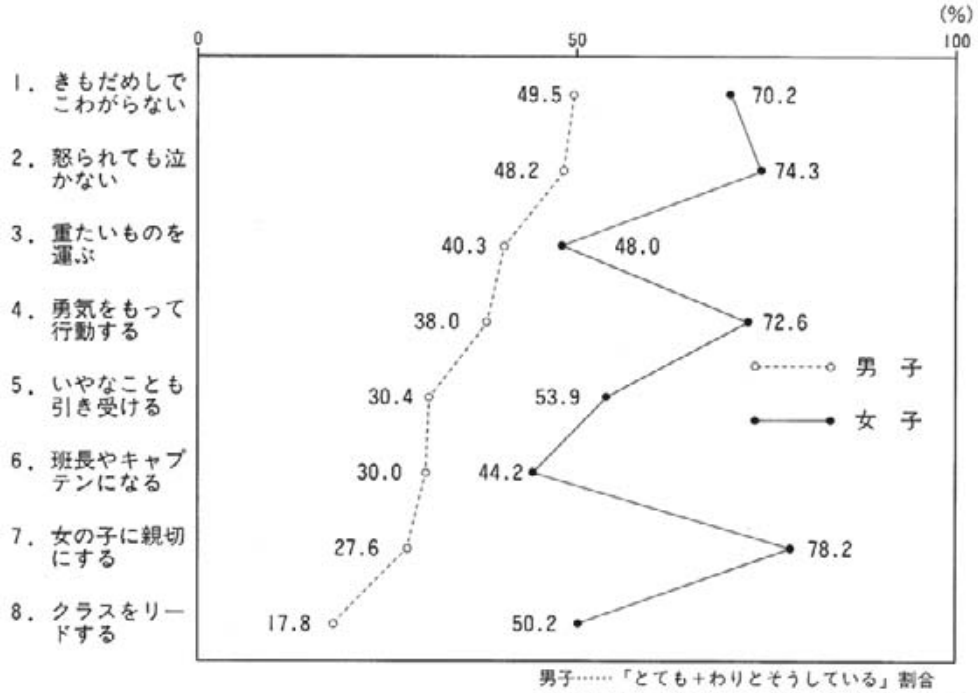


■男の子とは？ IIII

最後にまとめの意味も含めて、「男の子とは、どうあるべきか」を男女両方にたずねた結果を見てみよう。**図18**が示すように、まず全体としては、男子より女子のほうの「こうあるべき」とする要求が強いのが目につく。男子が自分について意識しているのは1位が勇気「きもだめしでこわがらない」（とても・わりとを合わせて50%）、2位が強さ「怒られても泣かない」（48%）、3位が「重たいものを運ぶ」（40%）であり、さらに勇気に関連した項目としては4位に「勇気をもって行動する」（38%）が続く。しかしリーダー役割を果たすことは（女子に親切にすることも含めて）苦手なようで、最下位に3つの項目が並ぶ。これに対して女子が望むのは1位が「女子に親切に」（78%）であり、次いで「怒られても泣かない」（74%）、「勇気をもって行動する」（73%）、「きもだめしでこわがらない」（70%）が7割を超えている。リーダーとしての特性はここでも（女子に親切にする以外では）期待が低い。また「重たいものを運ぶ」「いやなことも引き受ける」も女子の期待の中では低いほうに入る。

先に見てきたように、女子の中にある理想の友だちは、外見的なかっこよさが学年と共に上昇していく傾向にあった。しかし基本はここに示されたように、「女子に親切に」しかも肉体的より「精神的に強く」であるようだ。「男はタフでなければ生きていけない」というコピーがあったが、男子たるもの強さ（日本語化したタフ）だけでなく、容姿がよくて女子に親切に、という女子からの要求に応えなければならない。男子にとってつらい（きびしい）時代が来ているようである。

図18　男の子はどうあるべきか×性別



男子……「とても＋わりとそうしている」割合
女子……「とても＋わりとそうしてほしい」割合